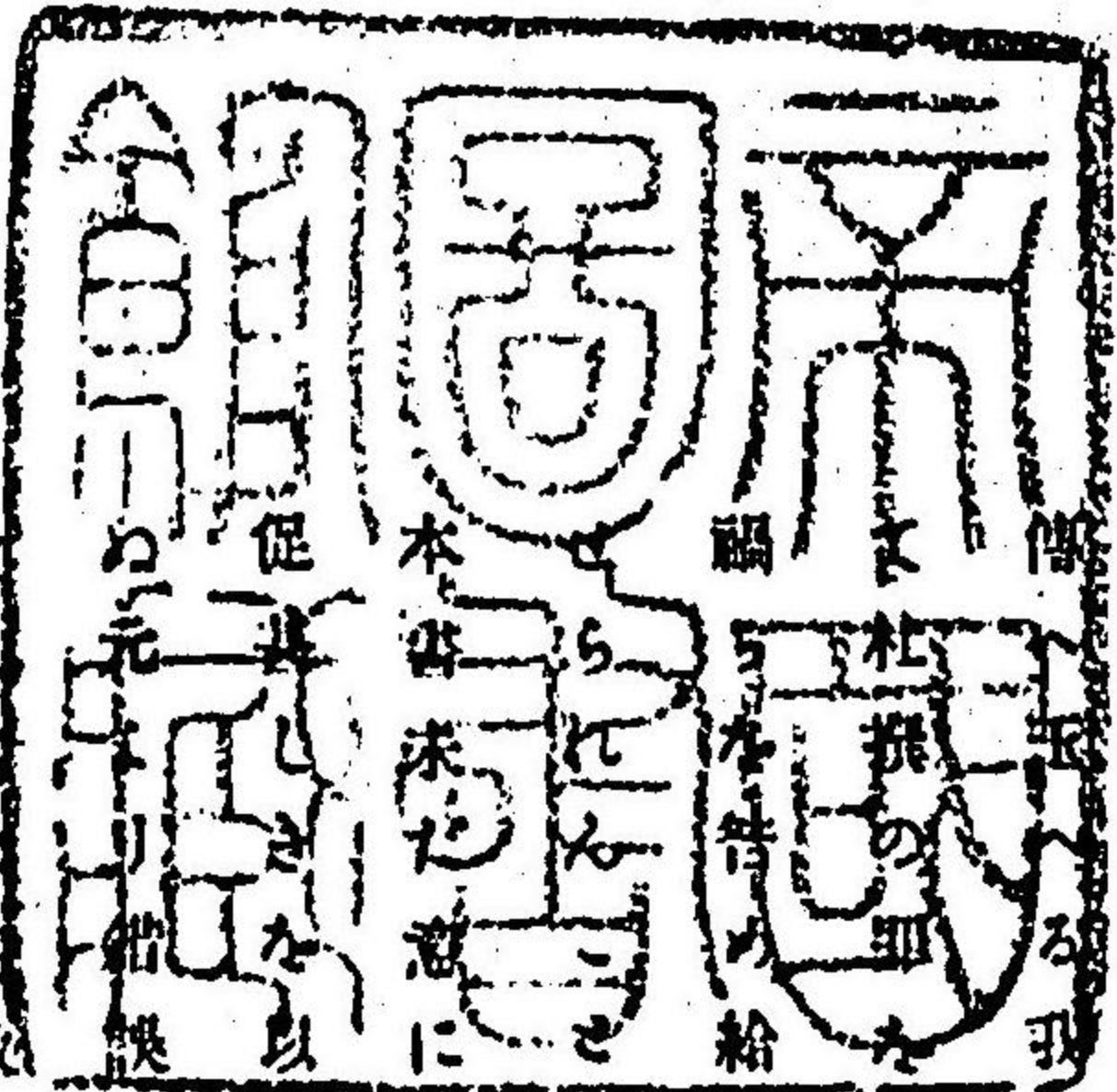


無知齋藤誠逸郎著

教義叢談

252
775



神界の靈光を與へられ金光教祖の眞理を
 傳へ玉ふる我恩師田地先生に本書を捧げ
 謝す伏して仰ぐ大神の我
 願を叶はすして之れが完成を神助
 されんことを
 本書未だ意に満たざる處多きも大方の音
 促其しきを以て遂に梓に上すことなし
 元より錯誤無きにしもあらず冀く
 は讀者の高教を待ちて否な先輩の教諭に
 よりて成を他日に期せん

明治
 40 3 9
 内交

(1)

◎教義叢談序

天地は永劫に無始無終、時間は永久に無限無窮
嗚呼實に去來解すべからざるは人の精神、幽遠
知るべからざるは宇宙の秘密あるか、古來の
哲人多く宇宙と人生に向つて思索須らくも止
まずして、人悉く迷ふ、古來此の門に入りて之れ
を開かんとしたるもの多し、然れども空理に走
せて實に近からず、近きを遠きに求めて人と相
副はず、畢竟理想に偏し有見に墮す、獨り我

金光教祖は日本より出て彼れに依らず之れに習はずして眞に直覺徹、底初めて遠大の眞理を傳へらる、即ち神誠正傳あり、又其後之れを次て天地の大理あり、余輩淺學敢て蛇足の辭を用ふるの要かし、初め神縁を田地先生に受け爾來道を究むること數年、其間諏訪に遊びて杉野講師を訪ひ甲に依り乙に従ひ或は口授に或は講話に蒐集の爲め年を閱する幾年、漸やく集むるところ三千有餘訓に至れり、是れ元より自己修養

(3)

の爲めにせしもの、然るに近來道を同ふするの徒類りに之れを剗削に附して衆人に分かたんことを以てす、余之れを辞し未だ替せざること二年、熟々考ふるに神訓は生ける訓戒あり、萬一之れを以て他の信徒をして靈光の域に到達せしめ以て本教の眞理を認識するの一助ともあらば、又以て報恩の一端ともありふんと遂に志を同ふするの徒に分つことゝかしぬ、されど教規にも管長の許可あくして猥りに斯道の註解

等を上梓刊行するを禁ぜられたり、須らく慎重の態度に依りて再考せざる可らざるべからず。此の書たるや余一己の記録書に過ぎずして、又今回の舉唯同志へ施本たるの外おければ敢てやましき處あきを信す茲に讀者に捧げて批正を仰ぐと云爾。

明治四十年三月

於無心庵 著 者 識

◎ 教義叢談目次

第一章 教祖零傳

教祖零傳の序

第一節 教祖の事跡

第二節 立教に従事し給ふ

第三節 我教祖は文明的活眼を以て固陋の迷夢を覺醒し玉へり

第四節 教祖平常行作の一斑

第五節 大道照代に逢ふて初めて光を輝てり

第六節 神誠十二條

第七節 教祖の歸幽

第八節 教祖事歴の梗概

第九節 結論

終

第二章 靈 驗 論
第三章 教 林 一 枝

- 一、 信仰に就き
- 二、 佐藤薇洞氏の所論を讀む
- 三、 至大至剛の力(天地金の神)

第四章 感 想 餘 談

- 一、 靈驗の動機
- 二、 病の起る原因

第五章 真 道 の 心 得

- 一、 道教の大綱
- 二、 信心の心得

第六章 金 光 教 に 對 する 余 の 感 想

第七章 神 訓 集 後

教祖畧傳の序

余固より不才不才加ふるに四邊の境遇に餘義なくせられたる繁忙の身
能すに識なく書するに暇なし、余は他日を期して完成せんとす、回顧
すれば舊幕府の階級なる封建制度は、如何に社會の自由を妨げたりし
か、如何に平等の眞理を疵けたりしか、曰く士農工商士は先天的尊し
となし土百姓町人と稱してさげしみたる當時、然かも差別の天地より

も甚しく明かに定められしことよ、
本末は誤られ皇、上は忘れられたり、將軍は如何ばかり尊かりけるよ、
天下の樞機は果して誰の手にありしや、既に世は黒幕の中に埋られた
んぬ、道義は其光をさへ認むること不能眠つり、ありしなり酔ひつゝ、
ありしなり、

此時に當て志士は叫べり尊王は囁けり、幾多の血と涙を以て改革復古

せられしものは自由にも平等にも非ざりき、唯忠君愛國の赤き血潮のはとばしりにてありき、

今より我國の以前に溯りて往古の事迹を追究せよ、抑も我朝建國の所以及君臣の關係は歴史上に於て如何ん、

吾天皇は神聖にして犯す可からず吾皇統は連綿として一系の皇統なり清き五十鈴川の流を汲みし余輩國民は皇室の尊嚴と神の大恩を知らざるべけんや、

燦々たる櫻花の嬋妍、秋月の清瀟湖の花水の音、嗚呼此の悉皆萬象の美然かも此の天眞の美に對して神の存在と宇宙の不可知に向つて實に憐むべき小智肉眼を捨て、大智心眼を開きて靜かに此の自然の大觀に眼を注げ、神は余等をして生育せしめつゝあるなり、

されば教祖は、信條の第一に神と皇上との恩を知らぬこと天の恩を知りて地の恩を知らぬこと、王法爲本神人の關係を説破せられたり

其當時の狀況を顧みよ其の際や幕府跳梁天下の政權は一として大樹自らの手にあり、天皇あれども其の影を認むる能はず、徒らに將軍の尊きをのみ知りて、敢て皇上の尊きを悟らず皇室式微獨り識者の涙を増すのみ、

蒲生高山の勤王家はさておき頗裏は何が爲めに日本外史と政記に於て熱血を濺ぎしか、革命の卒先者として數多有爲の士は踏れぬ、安政の大獄は黒き血を濺しぬ、如上の如き暗夜の濁派中に座して、

教祖金光大神は大谷の寒村草莽の一布衣かしくも神慮の肺腑より出でし涙は幾許り香はしき神訓よ、曰く神と皇上との大恩を知らぬこと、余は此に於てか知る、唯其一言は漸く王政復古の今日に至り如何に天の福音なりしぞ、百萬の歴史千百の書にもまさりて此の簡明の字句の殊く且深長なることよ、

社會は聖武の頃より傳はりし陰陽の邪説に溺れて日の吉凶方位の善惡

を撰べり、異端盛に行はれ淫祠到るところに設けられ、世俗滔々として邪徑に赴き復大道を行く者なく天下は濁れり、國民は醉えり腐敗と荒涼を以て浸蕩し盡しぬ、

教祖は微々たる眇身遂に起ち給ひぬ、然かも擧て非とせらるゝ中に、濁れる激浪と烈き嵐の中に四面は批評と惡神を以ての楚歌にてありき、狂瀨と愚者を以ての嘲笑の語にてありき、然かれども動かざりき信念は遂に天地に徹し玉へり、清烈なる大谷の流は餘りに清かりき、社會の最後の見舞は敬神と愛慕の讚美と凱歌にてありき、見よ二十年祭の盛大を大谷は人を以て餘地なし金神驛に向ふ車窓は立錐の地なきを、彼の「ソクラテース」は鳩を仰ぎて死せり然れども猶怨まざりき彼の心には喜びと安心とを宿せばなり、「ルーテル」は何が故に「ウィッテンベルグ」に於て公衆の面前に破門狀を燒き捨てしか、社會は迫害を加へんとしたれども能はざりき、「チャールズ」の威も遂に眞理を妨ぐるの力

なかりき「オルム」の會議は遂に自由を與へたるに非らずや、孔席不暖木突不黔七十二君に説きていれられず一生を放浪落魄の中に終へたりしも、其の教理は永劫に生けり、釋迦は眠らんとする際何と叫びしや吾れ死せず眞理は未來長へに活けりと、我教祖が萬難の辛苦を嘗めて不屈不撓超然脫俗、一生の褒貶は既に關せざるの境に至り玉ふて衆生に説き玉ひし教への深遠なることよ、日本開闢以來未だかつて直覺的、一、大宗、教、家、を、出、さ、ざ、り、き、古、來、の、高、僧、僅、か、に、佛、教、の、流、れ、を、汲、み、し、の、み、儒、教、然、か、り、耶、教、然、り、唯、一、人、の、普、遍、的、宗、教、者、金、光、大、神、を、見、出、せ、り、

教祖の死に際して實に寂しかりしだけ、現今の盛大なることよ、本教は獨立せり社會に出たり、弱者よ來れ神は汝等に安心を得させんとはすなり、

衆生よ來れ汝等に天の地大理人生の本源を知らしめん聊か序となす

●第一節 教祖の事跡

教祖は 氏を金光と號し名を大陣と稱せらる幼名を源七と云ひ通稱は文治郎なり

抑も氏を金光と號し名を大陣と稱せらるゝに至りしは即ち教祖の人となり信神の一念に厚かりしの致すところにして、此は皆神宣によられしものなり、且氏を金光と號せらるゝに至りしは安政六己未年正月十日にて又名を大陣と稱せらるゝに至りしは明治元年九月廿四日なり、抑も教祖は父は香取重平と云はるゝ方にして其先は毛利氏の臣宍戸安守なりと、

實に安守八代の孫香取氏の次男にましまして文化十一甲戌の年備中國淺口郡占見村に呱呱の聲を上げ玉ふ、是れ未來の救世の主たらんとは漸やく長ぜらるゝに及び賢明にして穎悟衆と異なり常を超ゆ、文政八乙酉の年歳十二才にして全郡全村河手祭治郎氏に嫁せらる是より祖

父の名をつぎて文治郎と名のらる、其後天保十三壬辰年又國太郎と改めらる是は其當時領主蒔田侯と全名の故を以てなりき、天保七丙申の年養父の遺言に従ひ再び氏を赤澤と定め玉ふ、妻は同村古川八百藏氏の長女にして登勢子と云ふ、教祖の御子八人座せしも現存し玉ふ者僅かに男二人女二人にして即ち現管長及副管長と他は藤井氏及古川氏に妻ぎし二名なり、

●第二節 立教に従事し玉ふ

嗚呼教祖は如何なる境遇にませしか富めるに非ずと雖も又多少の餘裕ありしなり、身は賤しき一農布たりしに過ぎず、然かも先天的脱俗せる頭腦と詩的の偉大なる情熱は長く教祖を農夫として免さざりき、遂に志を立て給ひぬ救世の道に投し玉ひぬ、

然かも活眼を生ける宗教界に馳せらるゝに至りしは、恰かも天保十二辛丑年にてありき御年僅かに廿八歳にましまして、早くも神祇崇敬の

一念を發し玉へり、悉多太子は最愛の「マリア」姫と「ゴリラ」を見捨て、山に入りしは彼の眼に老病死苦の無常を映じたるが爲めなり、是の血多き悟りは利名を忘れたるなり救世の主として叫びたりしなり、「クリスト」は社會に神の使として愛を説けり、十字架上に流せし血潮は如何に人の爲めに温き愛の泉なりしぞ、

吾教祖は實に社會の弱者に向て天地の大理を説破し、古來未だ嘗て悟り得ざりし廣き正しき大道を世人に教へんが爲めに三十有餘の星霜を茅屋の中に修め玉へり、社會の暗黒に向て一道の光明を與へ玉へり報本反始忠君愛國の思想を鼓吹し玉へり、社會の反對と迫害を蒙りつゝ、怨まず悪まずやさしき御心もて教へ導き玉へり、

嘉永五壬子年御年三十九才にして愈々顯幽感通の妙理を悟了し玉ひ、後三年を経て安政二乙卯年九月拾日立教の神宣を奉じ、天地の大理をかんじ茲に全く業を廢し献身の赤誠をもて斯道開教に身を委ねらる、

此の時に當り深く感じ玉ふところありて家財を三分せられ其一を家名相續にあて、一を時の領主に献じ一を貧民の救助に致されたり、抑も教祖が斯道の教導に挺身脱俗せられし所以の者は一に神宣を奉じ以て天地の正理に徹底し、玉ひしものなりと雖も、又大に世俗の惑へるを慨げかせられ報國救世の厚き御心をもて、公道に則りて日夜倦まらず淳々と説き示し玉ひしものにして、當時慨言の一に曰く現時の有様を洞察すれば慨はしきこと限なし、苟くも万物の靈長たるものにして徳廢れ行乱れ誰一人として天地の大徳を知るものなく又救ゆるものもなく徒らに五倫の名は存して實行する者なく人にして禽獸を拜して之を怪まず人にしてしかも鳥獸に劣る之れ大に嘆ずべきなりと語至言と云ふべし、

現時物質科學は日進月歩の勢を以て形以下の學盛んなり、明治時代は文物過渡の時代にして大に形以上を難じ、未だ三分の一餘の無宗教者

を出せり、又宗教信者たる者十中の七八は下劣の信仰に迷ひ、伏見稻荷の御遷宮に氏子の狂せる如き、神符は金銭によりて贖はれ、僧侶は遊民として衆生の膏血を絞るの外なし、法を賣り人に依りて生活しつゝあり、教師は壇上に立ちて聖書を講ずる時の真正なるだけそれだけ偽善を有す、

世は偽善者に非ざれば大低悪人を以て満たされたり、教祖の神の如き見地と徳行は天下誰か及ぶものある、

●第三節

我教祖は文明的活眼を以て固陋の迷夢を覺醒し玉へり

見よ其當時を徒らに尙古主義のみによれる非文明の時代、海外の見聞なき「チョンマ」連」到底自國の舊思想を墨守して排外の僻見に眠れるなりき、

彼の華山や長英は螺繼の中に生涯を終りたり、象山は胸裡に大なる望と智とを痛して空しく木屋街頭に倒れたり、子平の慨國憂世は海外防

禦を説けり、其説新しきが爲めに、世人の耳を聳かして其の周圍園の中に呻吟して死せり、

されば昔時より浸染し來りし陰陽の邪説は此の頑陋の諸子にはいかに深く深く浸み込み居りしぞ拭ふ可らざる痕眼を刻みつけしなり、

世人擧て日の吉凶と方位の善惡を選べり、今より考ふれば愚の至りなりしと雖も幽靈怪談に耽れる思想には無理もなき次第なりと云ふべし況んや山伏方位家又は陰陽師すらありしなり、

斯の如く古老の徒が天地の眞理を知らずして徒らに家相を恐れ方位を忌み以て人生の自由を欠き其不便云ふ可らざるを慨かせられ「今よりは方位を忌まず吾教の昔に復れへよ」と教へられたり如何に本教が社會に出て、冥々の中に大に風教を助け教義唯一の本領たる世道人心の主導者たるに愧ぢざりしか、

此の一語言簡なりと雖もかゝる時代に於ては如何に耳新しく響かれし

ならん、腕かに破天荒の囁きなりしならん、是が爲めに敵。多の易學者や山武士の反抗を買ひたりき、然れども眞理は遂に盛世に逢ふて初めで光を放てり中天の月の如く秋の夜の明星の如くに、

●第四節

教祖平生行作の一斑

教祖御齡自立に達し給ひ、獻身的修養に身を任ねられしより以來燕去り燕來り雁來り雁去り木綿崎山上青き松葉は落葉を重ね又木の葉の縁なりしも幾度か紅となりぬ又開きし花も幾度か落ちぬ三十有餘の星と月は循環しぬ、

其間に旗藩置縣の實は行はれたり、王政は復古せり海外より黒船は來れり櫻田門外時ならぬ赤き花を開きぬ、其の長日月終始一日の如く夙夜倦まず厭かず身を捨て、社會を救ひ給ひぬ、

余は知人に聞きしとあり教祖社會の反抗と迫害の間に立ちて毫も屈し

給はせ、粗衣粗食貧人すら食せざるの菜根を食ひ盡して献身の修養に投じ給ひ、獨り大悟の三昧に耽り給へり、靜座虚心天地の幽玄宇宙の秘密に向て研鑽に従事し給へり、其衣其食共に涙の出るを覺へざる程なりしと、目下大坂難波教會所に藏むる調度は幾許か吾人に連想を引起さしむる、飲けたる茶碗破れたる衣服是れぞ教祖が最上の調度なりしを思へば、

法を賣れる僧道を闕ぐ宗教家小成に安ずる偽善者信者の膏血を搾る教師共に慚死すべし汝等は社會の「ボーンフラ」なり何の功獻する處あらん汝等死せざれば社會は遂に救はれざるべし耳あるものは聴け否心に問へ目に視よ否頭腦に銘ぜよ身を捨てよ社會の犠牲たれ由來名利を離るべし能はざる輩は未だ世を救ふと能はざるべし世の教師よ特に本教の教師よ能く教祖の辛苦を思へ謹て修養の當時を考察せよ欲に迷へる教師利にさどき宗教家法を闕ぐ僧侶偽善を物語る牧師共に汝等に教ゆる所

あるべし、

元治元年の中秋、ある一姫あり俗に云ふ牡丹餅を携へ來りて神饌に供せられんことを請ひて去りぬ、

依て教祖は是れを禮壇に捧げ玉ひしに不圖神の示すところありて心に其の毒あるを悟り給ひ徹に慈なきを得たりと、

然かも教祖は其罪を惡んで其人を惡まらず此の可憐の老姬に對して厚き同情と涙を注ぎ玉ひ一日も早く改悟の心を起して眞心に立ち復る様斯念し給へりと、

抑もこは如何なる所爲なりしかと云ふに教祖は前陳の如く正理公道を奉じて教導せられし故に、怪しき修驗者等の爲めに忌まれ遂には毒殺せんとて此の一姫に事を托して茲に至らしめしなりき、

嗚呼如何に教祖の御心の廣く且大なりしとぞ、人生の尤も得難きは生命なり、然かも其生命をして奪はんとす、是れ人道に於て尤も悖徳者

人面獸心の處行なり、然かも此の惡婆に向ての見舞はかくもやさしき御心なるを、

之れ畢竟己れの生命を忘れてさへ彼を愛し給ふが故なり彼れを救はんとはし玉ふが故なり、
神と云ふも豈過言にはあらざらんや、

此の事を以てすら其の平生の心行を窺ひ奉るを得ん、

尙是の如き事迹は擧て數ふ可らずと雖も今は只其の一を上ぐるのみ他日詳傳を作るの際に譲る、

●第五節

大道照代に至りて初めて光を増せり

是より先き、教祖日と方位に就きて説破せられたり、然れども愚昧なる人々には往々是れを奉ぜざるものありき然るに明治五年十一月改暦の詔勅下り以て太陽暦を頒布せらるゝや教祖はそを押し戴きこれこそ余が積年御神意を奉じて教へつゝありし處なりしが時期當に來れり

と欣然として仰せられたりと、
かく教祖は世の人往々謬れるを今や維新と共に廢せられ天地の大運明
になりしを歡喜せられしなり、

然るに猶古俗には新曆にては月日の善惡を知るに由なしとて感ひ來り
しかば諭し玉ふらく、
今月今日で頼め御蔭は和賀心にあり」と、如斯平易なる言葉もて慰め
玉へり、

又或る人教祖に向ひて死後の靈祭を問ひ奉りしに教へ玉はく狐狸の如
きものすら尙神に奉祀せらるゝを好めり况んや万物の靈長たる人にし
て死後神に祭らるゝを望まざるものあらん、されば能く誠の大道を踏
み死後神として祭らるゝを樂しみて一心に願へよと、此の簡的なる至
言を以て人心を安堵せしめられき嗚呼人にして禽獸にだも如かざるべ
けんや、

●第六節 神誠十有二條

長日月然かも紅顔青春の頃より白髮衰顔の間天地の長日月に對し、獨
り果脱の境に出入して厚き尊き信心の一念によりて、天地の眞理を感
得し顯幽感通の道を得て神慮の隨に眞の道の心得十又二條を傳へらる
其の中には箇人の安心立命も國家の教義道德も見ながらに備はれり、
實に神言なり謹て是を準繩とせば廣くは人たるを得可けんか、

眞道の心得 (信條)

- 一、神國の人に生れて神と皇上との大恩を知らぬと
- 一、夫の恩を知りて地の恩を知らぬと
- 一、幼少の時を忘れて親に不孝のこと
- 一、眞の道に居ながら眞の道を履ぬと
- 一、口に眞を語りつゝ心に眞の無きを
- 一、我身の苦難を知りながら人の身の苦難を知らぬと

- 一、腹立ば心の鏡のくもると
- 一、吾心の角て我身を討つと
- 一、人の不行狀を見て我身の不行狀になると
- 一、物毎に時節を待たず苦をすると
- 一、壯健な時家業を疎にし物毎に驕ると
- 一、信心する人の眞の信心なきと

其の他道教の大綱真心の心得等數多の教訓あり、是れ皆神の肺肝より
 送しりし戒めなり、沙漠上の泉なり航路の羅針盤なり嗚呼神旨至訓、

●第七節 教祖の歸幽

斯く教祖は道の爲めに獻身從事せられしより、茲に三十有餘年の長日
 月唯身は小屋に端座遊されて他出し給ふことなく誠意一貫以て神明に
 奉仕し、日夜教を請はんとして來る信徒を厚く懇ろに説き示し給ひ、
 親切に教導あらせられ、既に數百の徒弟は四方にありて斯道の布教に

補翼するあり、幾多の信者は漸く日に月に増加して數幾萬なるを不知
 僅々三十有餘の短日月に長足の進歩を以て教務は擴張せられ無慮の蒼
 生は日々助けられつゝあり、
 見よ教祖の神去後二十年祭を行ふの際は既に獨立するの氣運に際會し
 たるに非ずや、

嗚呼其の盛大なることよ、

明治十六年十月拾日享年七拾歳にして歸幽せらる、

備中國淺口郡吉備村字大谷木綿崎山上に葬り奉りて教祖金光大神人加

威乃命の奥城と號し是が碑の周圍に眞の道の心得十二條を刻す、

是は信仰の徒が建設せし所なり、斯の如く教祖が此十月十日に歸幽さ
 れし所以の者は生存中常に豫言せられしものなり、平常教へられける
 に九月十日は吾祭日なりと仰せられき、

然るに果して改曆と共に新舊相同じき十日實に符節を合する如き妙理

を悟了し給ふに至る、
是を以て視るも既に教祖が生前已れが歸幽を知り給ひし者にして至誠
の徳は實に自由の真理に出入し給ひしなり、實に脱俗し玉ひし神の神
たる所以なり、

尙教祖の言行を上げんとすれば限りなけれども只其の一二を記すに止
めて餘は省けるなり、

今遺し給はりしものをあぐれば

- 一 眞の道の心得
- 一 信心の心得
- 一 道徳の大綱

其他世に顯はれざるもの數多あり、

● 第八節

教祖事歴の梗概

謹て教祖事跡の梗概を秩序的に記さんに、明治五年十一月廿六日制度

の改革に伴ふて小田郡より神勤を廢せらる、

茲に於て明治六年より全八年に至る迄人々皆教導職を志願せんを切

に勤め奉りしも頑とし動かせられずして曰く、今の世外見の美をのみ

飾るを以て得たりとすれども赤誠を以て神明に奉仕するものに於ては

何ぞ其の名の要を知らんや、と益々専心神に奉仕し給ふの念日々深

かりき、又是より先き慶應三年金の神社主金光河内と進められし時再

度上京し給ふべし、然る時は河内守とし位階を授けらる可しとの旨あ

りしも國の領主と位を同じうするを以て謙遜し給ひ遂に受け給はざり

しとこそ實に教祖の御心の慎直にあらせられ不飾不佞神の如き遠の如

き清き白き御心を伺ひ奉るを得ん是れこの教祖の教祖たる所以なれ、

此に於てか明治九年十月廿六日岡山縣令は左の旨意を以て許さる、即

ち衆人の歸依厚く誠に道義の師表たりと、

依りて參詣の徒に信仰崇敬の旨を説くも苦しからずと其の自由を免し

給ふ、實に我祖の赤誠も茲に至りて初めて空しからざりきと謂ふを得可し、今左に奉仕せられし一斑及傳記の一部とも見るべきものを列記せん、

備中國淺口郡大谷村木綿崎山に鎮座し玉ふ金の神社の額廢を慨き安政より萬延の頃に於て之れを再興せらる、

元治元甲子年四月九日神祇統領神祇伯王より金の神社神拜式許可を請けらる、慶應二丙寅年十月二日神拜の冠齊服淺黃差貫着用の許狀を請けらる、

慶應三丁卯年二月廿三日金の神社主金光河内と進められ神拜の際冠齊淺黃差貫着用の神仕狀を請け玉ふ、

全年二月十一日領主蒔田相摸守より永代苗字帶刀を許され紋付上下を拜領す、

明治二年四月淺尾藩社寺司局より備中國淺口郡大谷村須惠村鎮座神社

神体改め委員を被仰付、

全年十一月領主蒔田相摸守より準七等官御扱仰付らる、

明治三年十一月藩制度革め被仰出等級を廢せらる、

明治四年正月廿四日淺尾藩勸農課達を以て等級廢候に付家族一同村方へ歸籍仰付らる、

全年八月十九日領主蒔田侯東上に付送別酒料を下賜せらる、

全年十月十五日淺尾藩廳より神職を被廢、

但し神勤の儀は是迄の通り明治四年十二月廿三日淺尾藩勸農課より自分家族一同帶刀相成らずとの御沙汰あり、

斯の如くにして一日の如く一生を唯救世の道に盡瘁し給ひ能く社會の黎民を諭し給ふ其の間の心行は筆紙の及ぶ處にあらず、

歳0月0流0水0雲0徂0き0星0進0み0遂0に0明0治0十0六0年0十0月0十0日0長0く0も0脚0齒0を0豫0言0し0給0ひ0て0静0に0永0眠0に0付0き0白0玉0樓0中0に0入0り0給0ふ0、

神魂長へに滅せず千古天地に磅礴して能く衆生を守り給ふ矣

▲附記

左に教祖御遠祖歴代親族家族の御姓名を記さん

(此碑は大谷村の西南三四町計りの地にあり)

金光 太郎左衛門 天保七年八月六日歸幽

金光 伊和女 慶應二年九月八日全

金光 太郎左衛門 初代

碑面 金光家遠祖歴世親族家族の奥城

金光 龜太郎 天保十三年八月十六日歸幽

金光 蔭右衛門 嘉永三年五月十三日全

金光 知勢女

碑裏 (明治廿有五年八月中浣建之)とあり

金光 文治彦命 寛政十二年申年正月六日歸幽

(是實に教祖の養父君なり教祖の奥城の後方にあり)

木綿崎山頂に座す御靈墳を左に

教祖金光大神人力威乃命 明治十六年九月十日歸幽

金光登勢一子大明緩 明治十七年十二月廿四日全

故教監金光四神貫行君 明治廿有六年十一月十三日全

金光樓丸雅訓命 明治十四年九月十七日全

●第九節 結 論

諸士よ認みに一度大谷の村木綿崎山上を訪へ其の處には方尖石碑の如何に壯嚴に立てるかを、

是れ即ち教祖の永く靜に眠り給ふ處なるを、

松風は自然の瑟を奏て、無絃の調を彈ぜり幾多の信徒は集まりて神の

御徳を慕ひ村は町をなしぬ、

村人共に朴訥邊幅を修むるなく、宛然太古の風あり、嗚呼此山上に座

す神よ神は晝夜に眠り給はずして衆生の救世に務め給へり、
光の霽ひは普く社會に布かれんとす惠の露は限なく蒼生を潤はさんと
す、嗚呼此の尊き神よ、

余先年教祖の御靈墳に詣て、感泣したりき、信者の熱心に感じたりき
余の足らざるを慨きたりき、身の修まらざるを悔たりき、由來人間は
共に神に至るの力を有せり、然れども其の神より受けたる靈をして空
しく曇らせつゝあり行を改むると不能して人の人たるなく社會の木擇
たるを得ずして碌々其の日を送るを思へば慚愧するの外なし、
聞くならく僅か教祖永眠より二十の星霜を経し今日すら祭日、大谷は
人の山をさせしと、

嗚呼盛んなるかな此の祭典、

余は神の零傳を記すに當り心怵惕の感あり筆は進まず余は唯神に救は
れたるを喜びて不止呼、 (終)

● 秘

嗚呼神よ神よ其の幽遊ばされしより僅かに指を屈する廿、其日數凡七千有餘日、神魂遠
く白雲に乗じて、温容何處にか接せん、葛上方尖の石碑は形見として山上に殿に立てり、
徒らに教祖日常の調度は瑞喜の涙を無限の胸裡より呼び出して遺訓神誠は永劫に活けり
僅かの歲月無慮の人廣大の恩徳を忝ふして百万の黎民年に月に助けられつゝあり、
教務は日進月歩の勢を以て擴張せられ獨立獨歩他の宗教と馳駢するに至る、
教祖の清烈なる大谷の源泉は未遠く長く廣く深く及ぼさんとす、
仰ぎ見よ木綿崎の頂伏して見よ教祖心行の靈殿を、

僅かの星霜非常の艱難是れに依て漸やく天下の諸士の眼は開かれんとす、
當に此幽玄の境に鋤を仰し此の無限の大海に纜をとけ、 (明治卅四年舊作)

附記 今や益々發展の域に進み現に教信徒合して百餘万、教師の數千有餘名教會所
三百有餘に上れり、嗚呼前途遼遠たりよるしく信者たるもの報恩の爲め、聊かたり
とも斯道發輝世人救済に盡すべきことを肝要なれ、

● 靈 驗 論

吾等個體の分靈が、宇宙萬法唯一の根本的大靈に向つて全身滿福の信念を捧げて行得し、漸念し修行する時は、靈性は靈鏡の本體に通じ、靈鏡は靈性に感應し、箇身直ちに大心靈と一致し、大心靈直ちに個々と靈動し、境智冥合能所不二而かもこの本体界には生死なるものなく、病苦なるものなく、言論以上名狀以外の妙境を感得すべし、所謂常樂我淨の四字は、此間の神聖を表したるものなり、即ち宇宙の大自然は神なり、吾人の神てふ志想に超越する神なり、神の上の神なり、此神や形を以てし人格を以て想像し得べき神に非らず、即ち我命光教祖は、

宇宙の大自然、根本的活動の靈体大極を宣傳して、「天地命乃神」と説破せられたり、實にこの靈体の發作に由りて萬物はこゝに活動するなり、この靈妙大極の力は常によく小極を制す、常によく物質を向上せしむ、常によく原形質をつくる生命を造る、禽獸草木を造る、人を造る古人が造化と云ひ化育の力と云ひたるは總てこれなり、然り大極は造

化なり造物者なり化育の力なり、

そも、宇宙は無窮無限なり、無窮無限は到底人智の解すべからざるものなり、到底解すべからざるものを解せんとするは愚なり、然れども吾人は解し得る限りを解せんと勉めざるべからず、今天人論を借りて云はんか、地球の周圍萬四千哩と稱す、一時間廿哩の汽車に乗り晝夜間断なく走り五十日にして一週す可し、之れに約十倍するを地球より月迄の距離と爲す、即ち五百日にして達せらるゝなり、之より約四百倍なるを太陽迄の距離となす、五百年経ざれば達する能はず此の驚く可き距離をば僅に八分にして達する者あり光線の速力は是なり、地球に最も近き恒星は此の怪速力を以て三ヶ年餘にして初めて達す、吾人の肉眼の達し得る最も遠き星は、其光線五百年にして初めて地球に達す、更に望遠鏡を以てせば其一千萬倍の距離を望み得べし、千萬倍の距離の處にも星のある事は其以内と異ならず、天文學者曰く正直に計算して光線の走る事、千五百萬年にして初めて達する處に星のある事は斷言し得る處なりと、而かも此距離は宇宙の億々兆々萬分の一たるに足らざるなり、

更に哲學者の言を聽け、「ハミルトン」曰く我が心力の達し得る最遠の距離を想像し、其の盡る所より又最遠の距離を想像し、最遠に最遠を加ふれば終に宇宙の大を領得すべきか、否之を領得する程加へて又加へ行くには無窮の時間を要す、故に到底不可能なりと、嗚呼人の思想の走るは光線の走るに億々兆々萬倍す、此速力を以てして、猶は無窮の年限を要す、全く言語に絶し想像に絶するなり、

大は既に斯の如し然れども其の小を見れば殆んど大の解す可らざる如く解す可らず古人の歌に曰く、

「蚊の滴す涙に浮ぶ浮島の波の眞砂の千々に碎けて」と此碎片も猶千々に碎く事を得可し世に若し蚤の睫毛に鼻を作る虫ありと云ふも今の學者は驚かざるなり、「スペンサー」曰く物を碎きて又碎くとも遂に其極点に達す可からず、之に達するは無窮の年限を要すと實に宇宙の時間空間は到底人の智識及理解力の上の上なり、

されば「フヒヤル」は有名なる物力論にのすらく吾住める地球は太陽の光に照らされて空中に浮遊する一個の浮塵のみ、其の表面に寄生する生類の生命の如きは縦じ既に幾億

年の歴史を有し今後にも如何程の壽命を蓄ふも、太陽の光の盡ると共に消滅す宛も暗夜に燃ゆる忽ち消ゆる燐火の跡無きが如けん、若し五十年と積らるゝ一個人の壽命に至りては其短きと何とか評す可きや、餘りに淺墓にして評するに語なからん、而して此の宇宙の大極は即ち實體上の靈体にして言論の盡す可きに非ず、物質をして生物たらしめ、進化せしむるは唯だ此の宇宙大極の力のみ之を能くす、其の他のものはあたはざるなり、

然るに世の科學者は、物質小極の力が能く物質を向上せしめ得と思へり、小極とは宛も大極が物を集めて又集めたる大の極点なると全じく物を碎きて又碎きたる小の極点なり所謂分子なり、今より四十年前生物の生命が原形質より來ると知るや、學者は直ちに炭酸水窒の四元子を以て原形質を作り得べしと信じたり、然れども失望したり、彼等が化學鍋を以て分子を混合し捏造する、幾年に及ぶも元形質は製造せらるゝとなし、

是に於て彼等が涙を揮て白狀したる最後の斷案に曰く、元形質は只前代の元形質のみより生ずると其意は母の腹より生ると云ふに同じ、母の腹より生るゝ外には決して生ずる者

に非らざるなり、

蓋し單に科學のみの範圍に於ては止むを得ざる斷案なりと雖も、人智は科學のみに満足せず、若し科學者が其の科學者たるの資格を脱し吾人と全襟なる一俗人の心に返り而して能く此の斷案に満足すと云はゞ實に滑稽なり、

元形質は前代の元形質より生ずとせば其前代の元形質は何れより來れるや、今日に於ては一切の生物が母体より來ると云ふこと勿論なりと雖も、地球の大初は何物の生物も棲生し得ざる大熱火にあらずや、即ち知る最初の元形質は母の腹より生れたるに非ずして地球のある程度迄冷却せし頃天然自然に生じたる事を、

天然自然とは何ぞや、宇宙總体の物力の關係に非らずや即ち大極全一の力に非ずや、單に大極の力のみが物質を進化向上せしめ得るや知る可し、科學者よ人工を以て天工を奪ひ得ると思ふと勿れ、汝は唯物質小極の力を有す、大極の力は宇宙全一の外に有する者なし、

「ハウルセン」曰く分子と分子を如何程に、かきまぜて如何に捏造するも熊の毛一筋を生

ずる事なけんと眞に然り、熊の毛は唯熊の皮にのみ生ず、狐の毛は唯狐の皮のみに生ず其の毛たるに於て極めて些細なる差異なりと雖も大極の力は此の差異を識別して誤まるとなし、

大極の力は能く小極を製す、常によく物質を向上せしむ、常によく元形質を作る、生命を作る、禽獸草木を作る、古人が造化と云ひ化育の力と云ひたるは、総て之れなり然り大極は造化なり、造物者なり化育の力なり一切の靈妙なり、

試みに化學者の機械的なる心を以て機械として此の宇宙を見よ、絶大の設備絶大の構造に非らずや、凡そ物の完全と稱する完全の極度は唯だ此の宇宙に在り、何の漏穢か能く斯の如き無盡の動力を有するや、無窮無限の動力は是れ動力完全の極に非らずや、學者が永久自動の機械を發明せんと欲したるは、幾何ぞ今や永久自動は絶對的に不可能の事なりと判斷せられ、而かも宇宙は永久の自動なり、嗚呼其自然の宏遠幽妙なる實に不可知の体にあらずや、

天地の事は知りて知り難し恐るべし〜四季の變りは人の力に及ばぬものぞよ

物事時節に任せよ、

かくの如く大極と云ひ全一と云ふが如き絶大絶妙の設備を以てして初めて生命を製造し吾人人類を造り出すを得るなり、

若し有限有窮の小機械を以てせば物質は斯の如くに向上する能はざる可し、既に全一の大設備たるを知らず、次に其自觀を想見せよ、地球と云へる細微なる一程度に寄生する吾人人類と云ふ小の小なる者すら其自觀は心なるに非ずや、動に對する今日の定義は動は心なりと云ふに非ずや、宇宙の如き動の根元、動の本体永く自活して永久に自動する動の一切豈心の根元、心の本体、心の一切に非ざらんや、宇宙は心靈なり吾人唯だ之を他觀するが爲めに心靈として見る事能はざるなり、

宇宙の自觀を心靈に非ずとせば、萬物は一も解す可らず、吾人自らが言動する所以すらも解す可らず、若し宇宙の心靈たる事を疑ふ人は宇宙若し心靈ならずば其疑ふ心が何より来るやを考へ、自個が如何にして疑ひ得るやを省みよ、宇宙は心靈なりと云ふは、我れに心ありと云ふと毫も異なるなし全一確實にして全一明白なり

嗚呼宇宙は靈妙の極完全の極、

斯の如く天地則ち宇宙は時間に於て空間に於て無限無窮にして無始無終なりと雖も、其の宇宙の大極根本的靈體靈力は實に言語以上智識以上の大妙力を有して生々化育の力を備へ、こゝに万物万有を進化開顯向上生育せしむ、此の力ありてこそ初めて萬物生ずるものにして即ち宇宙を達觀して其の心靈に透達せば、即ち万物を生成せし靈力根本的實體を見出すを得可し、絶對唯一の大妙靈なり、之れによりて生育し之によりて初めて化育す、之れ即ち吾天地金之神なり、
されば敬祖は

疑を去りて廣き眞の大道を開き見よ、吾身は神徳の中に生されてあり、

生ても死しても天と地とは吾住家と思へよ、神は吾本体の大祖ぞ信心は親に孝行するも全し事、

と其の心靈界の妙体によりて萬物の進化せし所以を能く周到平易に説破せられたり、

今神誠正傳中を抜抄すれば、

扱て此の大天地は其の剖判の時より云々、之によりて之れを見れば其の幽玄にして深遠なる究竟の眞理を論破し玉へり、

しかも此の根本的靈体の進化開展によりて、初めて吾人は生存化育せらるゝものなりと能く其の靈妙なる神徳の廣大無邊なるを説き論し給ひ、宇宙の心靈の絶妙なる恩恵を忘るゝ勿れ神に感謝す可し其の天地宇宙の自然の大則に、このつとりて以て向上進化し道徳を跡み行ふべしと、

其の惠澤の宏大なるを示し世人の知らざるを諫め、

天の恩を知りて地の恩を知らぬ事、

天地の内に於て金の神の大徳に洩るゝ處はなきものぞ、

信心する人の眞の神徳を知らぬ事、

と説破せられ悟了すれば生死共に天地にして此の天地大極の神の力によるものなれば即此神の力は宏大にして漏るゝ處なし、

故に天地の神に信頼す可し天地は父母にして萬物は子なりと諭され玉ひ此の眞正の親を

知らざる故に天地の事を知らず其靈妙の徳を知らざるなりと説かれたり、宜しく晝夜其神の高大無邊なる神徳に信頼すべし、

神は晝夜も遠きも近きも問はざるものぞ、信頼も心に隔てなく祈れ、

清き處も汚き處も隔てなく天地の神は御守りあるぞ、吾心に不淨を犯すな、

天地の内に於て金の神の大徳に洩るゝ處はなきものぞ、

食物は皆人の命の爲めに天地の神の造り與へ給ふものぞ、

眞の道を行く人は肉眼をちきて心の眼を開けよ、

とかくの如く天地の大徳宇宙の本体即ち天地の大神を知り、天地の恩徳を知らざるべからざるに、人往々其の大恩を知らざるを慨かせ玉ひ、

神の恵み人知らず親の心子知らず、

と其の消息を慨かせられ萬一にも此の神徳なければ萬物生育し得ざるは恰かも父母なければ子生長し難きと全襟天地は父母なり万有は子なりと、

神信心のなき人は親に孝のなきも人の道も知らぬと全じことぞや、

神の教も眞の道も知らぬ人の憐れさよ、

神は聲もなし形も見えず疑へば限りなし、疑を去れよと垂教されたり、

實に宇宙は言論以上にして、到底人智以上理論以外なれば、宜しく心を開き心靈の窓より宇宙の靈界を見ざる可らず、然かもかゝる大心靈に向つて萬腔の信念をさしげて祈念し合一すれば必らず大靈に相通じ無限の大靈境に達するものなり、何となれば大自觀に於て相一致すべければなり平等界裡不二なればなり、

世の學者先生靈驗の妄なるを説き、或る者は架空の小説として觀じ、科學者は否と斷ずるものあれども、本教に於ては眞に驚くべき實蹟數ふるに違あらず、之れ果して神より與ふるものなるか、又は心のみより得るものなるか、換言すれば心理作用なるか暫らく教祖の神訓中を索らんに、

神信心して靈驗のあるを不思議と云ふまじきものぞよ、

信心して靈驗のなき時は是ぞ不思議なることぞ、

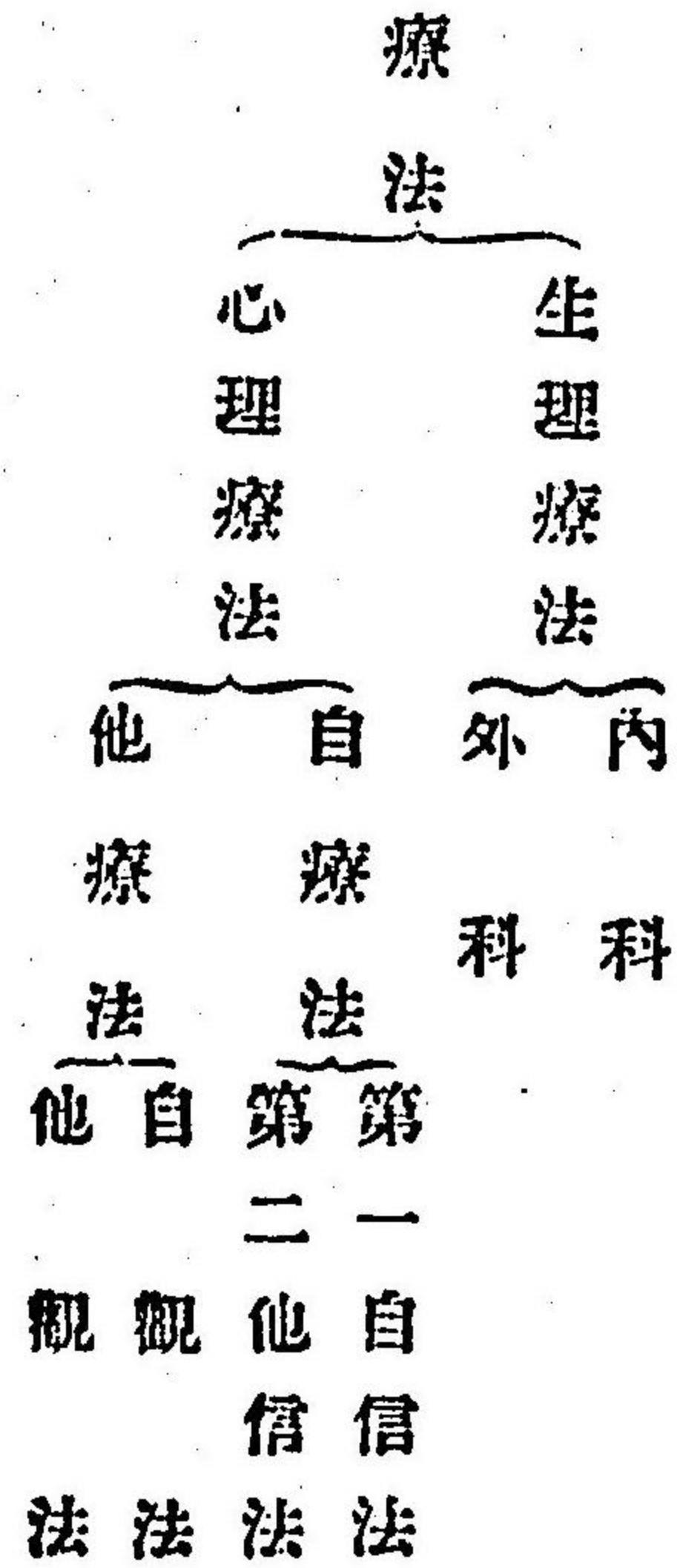
疑を離れて信心してみられよ靈驗は吾心にあり、

と之れに依りて之れを見れば教祖は靈驗は不思議にあらず、吾が心にありと諭かれしものゝ如し、余は井上博士の靈驗論を抄せんに、

曰く余は心理作用と云はん、梅園叢書に靈驗は吾信のある處により強り何の神何の佛とさすべきに非らず、鱗の頭も信心せん人はその驗を得べし、佛舍利なりとも信ぜざらん人には驗しあるべからず、物我心より靈なるはなし心の向ふ處自ら信あり、鳴る物も叩く時には鳴り、叩かざれば鳴らず、我一生餘念なく信仰せんになどか其感應なからん、磁石の鐵を吸ふも、磁石鐵を吸ふの誠ある故に鐵感ずる事ありて依る、唯石を以て吸はんとせば如何んぞ其驗あるべき、幻術者の幻をなすも平日の力凡て爰にあれば、人の目を奪ふ様のこともあるなり、一向其驗しなしと云はんも偏なりと、抑も信仰なる者は精神を一点に集めて其心に思想の專制を起すものなれば、思想内部の狀況に隨ひて仮りに外界を組立ることあり、譬へば吾人の夢境にある時の如く實際外界に存せざるものを精神内部の刺撃によりて其妄象を見ることあり、即ち神佛に祈る時は自ら身心に安慰を與へ其結果として無病息災を得るが如きは、豫期信仰の効果と云はざるべからず、實に精神

の變化にあり飽く迄學術によりて説明し得べし云々と、然れども余は余に一見あり、今之れを述べんに、

元來有限の外に無限あり相對の外に絶對あり、現象の上に本体あり仮我の外に真我あり凡そ宇宙の事ある点迄は説き能ふも或る点以上に至れば説明し得可らず、されば物心相對の上より解し來らば靈驗の如き毫も不可思議の点なしと雖も、若し更に理想即ち大心靈の方面より向下的に論ずる時は自ら其上に妙理の存する事あるを知らざるべからず、吾人一度神を信じて一心を其上に凝集する時は、其心内の天地に靈妙なる神の光を覺え不可知の妙味を感じて云ふ可らざる念想を生ず之れ理想的啓示にして實に神の靈驗なり



汝の信仰汝の病を癒やすとは之れ一面に於て真理なり、されど今一度此心、即ち病を癒すべき心は何處より來りしやと思案せんか、此の小心靈こそ宇宙の大我より來りしものなり、(理想の極致自觀に於て不去不來)されば此の大心靈と小心靈とは自觀に於て相一致し能所不二、一にして二ならず二にして一ならず、身は小天地にして宇宙は大天地又不異不同宇宙即身心、身心即宇宙、大我即小我、小我即大我、現象即本体、本体即現象須臾も離せず、されば小心靈大心靈に向つて向上する時、大心靈は向下し相應じ相通じ相合し融合して大靈より言へば感應し小心靈より言へば相信仰し茲に靈驗的發作生ず、之れ心からにして又そのもの既に大心靈の發作なり、既に其小心靈の肉体上に及ぼす力はこの大心靈の分身にして其の力は既に大心靈の力なるを如何にせん、されば神そのものが心にして、心そのものが神なり、宇宙の大精神そのものが個精神にして、個精神そのものが宇宙の大精神なり、故に小心靈のみにて神に關係なし、神のみにて心に關係なしと云ふを得ず、之を客觀的に説かば、

信仰起りて之れを神に捧げば神又合一して相交通し感應す故に心より得るものにして又神より與ふる者なりと云ふを得べし、(理想の境地與ふるも與へざるもなし)されば心のみとなし神を説かざるは一方に偏せし見地ならずや、

されば靈驗は向上的に祈る敬神の信念と又向下的に應ずる大心靈と二者相應じ相合して靈の域無我本体に入り心の一轉せし時信の光の起りし時御蔭の發する者なりと云はん、由來文章を以て充分に此の消息を説く事難し、畢竟は各自の信にあり到底妙境は神秘にして言論以上實に不立文字たり

もはや此の点に達すれば不可説絶對の境地眞に不可解之れを神のみとするも未だし心のみとするも未だし實に靈驗は其の妙境の發作なり、

况んや此の宇宙の自然こそこれ靈驗以上の不思議ならずや、嗚呼靈の域は靈の心ならずるべからず神の域は神ならずれば計り知るべからず、

神信心して靈驗のなきことを不思議と云ふまじきものぞ、

信心して靈驗のなきこれぞ不思議なることを、

第三章

●教林一枝

第一 信仰に付き

凡そ宗教なるものは、宇宙人生の眞理を了し、死生一如の安心を得せしめ、拔苦與樂吾人の精神を安樂的和悅的唯一思惟に措かしむるにあり、遣次も顛沛も過去も現在も未來も之れに在らしむるにあり、安樂的和悅的唯一思惟をして、不生不滅、不常不斷、不二不二、不異不去不來ならしむるにあり、心を無窮安樂ならしむるにあり、されば宗教の要は死生の安心を得せしめ、人生の本務を全ふし自己の價値を自覺せしむるが爲めである、されば幸福を望み、繁榮を願ふのみの慾望的信仰は畢竟信仰の入口にして、正しき眞信に非ず、もとより信仰の療法として、一心神に凝れば言論以上の靈驗なきにしもあらず古來より信あれば徳ありと云へり、又教祖金光大師が教へ給ひし神訓中靈驗に關する教なきにあらざれども、これ信仰の極致より起る靈驗的發作現實的徳を教へられたるものにして、本教根本の大目的には非らず、

されば神誠十二ヶ條の最後に於て

信心する人の眞の信心なき事と神訓せられたり、世の人本來をあやまる勿れ、僅の靈驗に眩して天地の大眞理を悟らず、却て迷に入り遂には狼狽して道をけがす者さへあり、これ即ち信心の道を悟らざる者にして、眞正の大目的は天地の大理を知り、心を磨き体を正しよして修養に修養を積み、心行に心行を重ね、神人一致死生安心の境に至り、吉凶も禍福も生死も病健も貧富も離合も聚散も名利も酒食も榮辱も悲哀も苦痛も快樂も之れに動せず移せず超然として、不動決定の眞我に達してこそ初めて金光教を奉ずる信者として究竟の目的地に達したれ、ざるを小恩のみを知り人生の大眞理を悟らずして、徒に無窮の生命を願ひ、無限の富貴を望み、唯慾望のみの信心に迷ひ、賢くも天地の神を醫師や造幣局祝し唯誤りし信心をなすが故に、或は災厄起り病苦死亡等の事生せんか、忽ち神をそしり自ら悲み寧ろ俗人よりも、笑ふべき狂態を演じ、遂には道を穢すに至る、これ皆自らの致す處にして、既に我教の眞理を知らざるもの、本教は病苦疾患を醫するが目的に非ず、即ち宇宙人生の大原理を悟らしめ、死生災厄に狼狽せざる大安心を得せしむる

が目的なり、もとより肉的人間なれば病苦を免れず、人生の至情として幸福を求め健康を望むは良し、又神に祈り道に縋れば信仰療法の理論よりして、必ず靈驗を受くる事必せりと雖も然れども、これ肉的生活の間にして永久のものに非らず、又人生あれば死あり、いかに禱るとも天命免るゝ事能はず、かるが故に死生の理を悟り安樂的眞心の本體にかへり死を恐れざる襟心を養ふが第一の目的ならずや、

換言すれば靈驗は一の信仰的結果にして、宗教の大目的には非ず、されば靈驗のみを望むは眞の信仰の大極致に非ずして誤りなり、よく正しき本教の深理に入り以て眞正の神徳を知り總ての場合に驚かざる不動心に達し、事あれば専念以て神に縋り生死吉凶神に任せて怨まず怒らず、成るも天命成らぬも天命、生くるも神意死するも神意なりと悟るべし、今神誠正傳中の章向をかりて説かんに、

病苦災難にして人力の及ばぬ事等につきて、御靈驗を戴けば此上なき廣大千萬の御神徳なりと云ひ、此世は神の世なれば生存中は神信心せねばならぬと云ひて信心する者も有るが如し、事をものみ信心の目的とする人は却て、苦勞を求むる事のある信心なるぞかし、

信大恩は知り難く小恩は知るか安しと云はんか、是等の信心も(靈験のみを望む信心)信心の一にはあれども皆真正の信心の廣き道に入るべき門口なりと、真によく此意味を悟るべし、又それ以上進みて信心の大目的に、達せざるべからざる事を論し給はく、

此の信心より今一層進みて奥深き真正の信心する處を尋ねるに、元來人の此世に生るゝは皆天地の神明の御恩徳にて、食物衣服住家等の萬物は悉く天の恵み、地の生じ與へ給はりて、寝ぬるも起くるも呼吸の息の活用まで天地の眞理神徳によらざるはなし、かくてその肉體や靈魂の歸處の末の世迄も、天地の神明の恩顧の外に出てゝは死にたる後靈魂の歸着もあらざるべし、さればこの深理を取り究めて小さく淺きまどひを去り、疑のよこ雲を拂ひて廣き眞の大なる道の深理を悟るべし、世の人この廣大無邊の深き神理を思ひ知らずして目前に靈験のなき時は、最早御神徳はなきぞと思ひ、甚だしきは神と云ふものは有りや無しやと、かたしき神明に疑を起し、迷ふ者もありこれ信心する人の眞の信心なきが故なり、

こゝに又敎祖の敎諭に

信心する人の眞正の神徳を知らぬ事と論し置かれたり、いかにも信心する人の眞の神徳を知らざるよりして眞正の信心に到らず、又その眞正の信心なきよりして眞正の神徳を得知らざるものなり、信心する人々よ、よく本條の意義を了解すべしと論されたれども實に現時の信者を通覽するに、皆悉く靈験のみを望む迷信者のみならずれば幸なり、實に望むべきは眞理の道なるかな、

抑も靈験のみを望み安心の根本を誤り、本敎の大道を陥み誤らば、決して永久の安心は得られざるべし、宜しく自覺三省眞理の靈光に辿り高き信仰の道に登り、世の爲め人の爲め其の本務を盡し、出でゝは社會の師長となり、入ては敎祖の名を輝し、以て報恩の萬一に盡し奉らん事を希ふべし、敎祖敎へ給はく
眞心の道を迷はず失はず末の末まで敎へ傳へよ

● 第二

佐藤薇洞氏の所論を讀む

靈光が祖神去りましてより既に二十有餘年、益々敎祖の發展を見るは悦びの至りに堪え

ざるなり、今や修徳殿も設けられ、藤洞氏又大學を卒へ大に雄飛せられんとするは本教の爲め余輩敬信徒の共に賀すべきことともなり、客歲美かけ誌上に於て本教の人世觀を説かれ又宇宙觀を説かる、議論正明雄大、竊かに將來斯道の巨擘重鎮として仰望したりしが今や其の教務に事へらるゝを見て一層の喜悅を増すものなり、或は厭世主義、樂天主義を併記して本教の超然主義に非らざるを破し、本教の現世的、社會的、平等的、世界的の宗教にして、努力活動主義を説かれ、宇宙論に於て本教の天地主義を教理の上より説破し盡されたり、余は其所論に徴して余の大に本教の眞理を悟了するを得たるを喜ぶ、嗚呼敬慕すべき先聖君の如き人を斯道に得たるを喜ぶ、

吾れ敬すべき人あり之れ吾師田地恩師なり尤も信頼すべき神あり之れ金光大神なり教祖人力威命なり、されど余は斯道に於て慕ふべき人三人を得たり、曰く佐藤教正、曰く畑教正、曰く佐藤微洞氏、本教の前途を多望なるかな、青春黃口の驚駭又遙に諸先生を仰がんかな、

由來社界を觀じて悲しとも樂しとも思ふは個人の精神なり、人は心と物とより成る、仮

りに之れを分ぐれば、動くは精神の力にして物質は精神を藏せる家屋なり、家屋を離れて主人無く、主人を離れて家屋なく、精神を離れて物質なく、物質を離れて精神無く、二者離せず、即ち二にして一、一にして二なり

波より見れば有なるべく色なるべし、消へて元の水に返りたるを見れば空なるべく無なるべし、寶鏡三昧に返りたるを見れば空なるべく、無なるべし

即ち銀盤盛雪明月藏鷲

といへるも東坡居士が

如投水海中如風中鼓橐

といへるが如し、しかも此の精神たるや思惟自由にして其心の働き方如何によりて或は苦となし或は樂となし、爲めに悲哀に沈み樂天に逸す、畢竟樂天主義又は厭世主義の如きは病的にして一方の半面に偏せし迷見のみ、

先づ眞正の心の本体をたどらんか、之れ苦樂絶對の境地ならずや、されば苦と樂とを二つながら捨たる處苦の世界でもなく、樂の世界でもなく、無苦樂の境地こそ眞の絶對地

である、種々の物思ひは皆精神の動搖に外ならず、波である若し精神にして少しも動搖せず波なければ宇宙の大自然大我そのまゝである、之れこそ絶對的樂地の精神、不動の精神である、

教祖は沈魂の一條を論され玉へり、嗚呼精神の修養なるかな、由來宗教家たらん者は眞理を説き人道を教ゆる以前に、そのまゝを先づ身に体得し行ふて見せる位の者ならざれば到底勸化は思ひもよらじ、眞に不言の徳こそ必要なれ如何に百万の理論を唱へても之を身に体せざれば畢竟何程の感化もなし、

嗚呼三聖未見の深理を悟り玉ひ我山水明婿の地、神州の境富士と琵琶湖の勝に誇れる大日本帝國より生れまして社界に光被し玉ふ名教の光り實に尊きことにこそ、

● 第三

至大至剛之力

(天地金乃神)

世には主觀的に生滅變化生々化育する大活動を、已れ自らなすものなりと云ふものと又客觀的に何物か過境的に左右するものなりと説明するものとあり、然れども余は左の如

き見解である即ち、

余の考ふる生々化育の妙力至大至剛の力を自家と云ふ、一個の小物体中に置くのでもなく、又之を過境的に即ち別に抽象的にも立つのではない、之を空間全体に置くのである、空氣のなき處はありともこの力の達せざる處はなく、如何なる微物中にも、如何なる極大の物の中にも、如何なる至堅の物の中にも、如何なる軟弱の物の中にも、處としてあらざるなり、物として含有せざるなく、微として入らざるなく細として残すなく望遠鏡の達せざる處にもあり、顯微鏡の及ばざる處にも存するは只此至大至剛の力のみであるこの意味から至大至剛と云ふ文字を仮りに用ひたのであるが、其實は何と名けてよいのか名は無いのである至大至剛と云ふけれども至小至柔の力ともなり、又中間の力ともなるので伸縮自在活動自在であるから、名の付けられざる靈物生々化々の妙力と謂はねばならぬ、この靈物妙力の方で萬有は變幻出沒生々化育せしめられるのである、宇宙間に如何なる大剛者ありとも、如何なる強者ありとも決して／＼此の力に勝つものはない、生物も無生物も一切の萬有は皆此方に左右せらるゝのである、此の妙力に依て

化育せられるのである、此の力は前にも云ふた通り天の極み地の限り至らぬ限なく満るゝ處なく圓満不偏に満ち渡る、故に天道立ち地誼従ひて、此に万物は活動するのである全宇宙の天体凡ては活動するのであるされば一言せば

此の力は 一切の現象を生む母である、現象それ自身は此の者と全体

と云ふてよろしー 之れ余輩の見である

即ち教祖が三十有餘の長日月方難を積み玉ひし教は何ぞや

即ち此の空間に充滿せる活動力根本的靈体を認め玉ひ其の靈物妙体不可思議の体を神傳により 天地金乃神なりと悟了せられ此に天地の神は万物の父母なりと説破せられしなり依て 天地は父母の如し神は万物の親なり人類は氏子なり吾子なりと宣ひしなり

故に天地の事は知りて知り難し、恐るべし

四季のかはりは人の力に及ばぬものぞよ、物事時節に任せよ、疑を離れて廣き眞の大道をひらきみよ、吾身は神徳の中にいかされてあり

生きても死しても天と地とは吾住家と思へよ

神は吾本体の親ぞ信心は親に孝行することも全じこと
 天の恩を知りて地の恩を知らぬと
 天地の内に於て金の神の大徳に洩るゝ處はなきとぞ
 信心する人の眞の神徳を知らぬこと
 天地の事は人の眼をもて知りて知り難し恐るべし
 神の恵み人知らず親の心子知らず

●第四章

●感想餘談

夫れ哲學なるものは社會究竟の理論、即ち形以上に通り智を見て靈界を思索し、秘密を極め宇宙人生の至上に至り不測の信を得んとすなり、宗教は然らず情を以て安心を求むるにあり、されば須臾も信仰の念慮を放すこと態はず、信仰は第一の生命なり信なければ既に死灰冷々何の得るところかある、信は宗教に於ける唯一の連鎖なり、抑も本教の至眼として宇宙の大理を悟らば神と人との繋る可からざる所以を知り、死生の本源を悟

れば死生一如既に生喜ぶに及ばず、死悲しむに及ばず生死皆天地なり神誠正傳に
 抑も此の大天地は其剖判の時より名く可らざる一種不可思議の妙力ありて生々化々の靈
 徳を具有へ相依り相輔けて萬物を生育せり、即ち天地は萬物の生出る本源にして又萬物
 の終歸る安宅なり、これ所謂我天地金の大神の御神性なり、この大神の恩徳は天の極み
 地の限り到らぬ限なく漏るゝはてなく、常に圓滿不偏に充ち亘らせ玉ふによりて、天道
 立ち地隨從ひて万物悉く化育せらるゝものなるを、廣き世の中には未だ嘗て知るものな
 く、又教ゆるものなく云々と、此の千古未發の宇宙の大理を悟了すれば既に宇宙人生の
 妙境に入り、以て自己の尊き所以生死不二神人一致の見知に達し、真正の大安心に至る
 ことを得ん、又客觀的には神は我太祖なることを悟り既に小智を捨て、無我一意神に托
 するの境に投入せば、既に生も死も吉も凶も神のまにまに不動の信仰に入ることを得ん
 靈驗は一時なり永久的ならず、何となれば之れ肉の間なり、靈に入れば無我平等決して
 肉の世界は永劫ならず、生あれば死あり、唯幸福願望のみの現實的慾徳のみを望むは之
 れ迷ひならずとも、眞の目的には未だし、望む處は生死吉凶壽夭長短禍福一切を超絶せ

し不動の大安心こそ、初めて究竟の境地なれ、

生、き、て、も、死、し、て、も、天、と、地、を、我、住、家、と、思、へ、よ、天、に、任、せ、よ、地、に、絶、れ、よ、

然れども何程高遠の理想地に入り、平等觀に達すとも、血あり涙ある吾人は全しく情の
 爲めに苦められ、僅かの事に喜び悲しみ、又泣き怒ることを實にうたてけれ、

されば何事も無益の煩勞を避て心の本体に入り益立たぬ物思ひを爲さざるこそ肝要なれ
 神誠正傳に

然れば此の苦を去るには如何にせばよからんと云ふに、只天地の眞理に則りて眞道
 の信心の方に善惡諸共に打任すぞ所謂壽命の洗濯とは云ふべき、世の中の事は萬事
 萬端天地の道理の支配する者なれば、時節時節に身を任せて時の到らぬに心を苦し
 むることなく、物の順序自然の道理を知りて天を怨まず地を不足と思はず、一向天
 地任せに世を渡る心もて叶はぬ苦をせず、役立たぬ心配を爲さず、吉きも凶きも善
 惡諸共に惠深き天地の神の神慮に隨ひ廣き眞の道を亘り往けば即ち安心を得云々と
 眞に然り去るべきは無益の苦にあるかな

信條第十條に教へ玉はく

物事に時節を待たず苦をする事

● 第一

● 靈驗の動機

抑も靈驗なるものは形以上を目標とすれども即ち心機一轉の時に起るのである、信じて疑はざる心眞に絶るを云ふ信念より發現するものである、即ち神を祈るに其の間に寸毛の隔てもなき所に初めて靈驗は現はるゝのである即ち

疑、恐、怒、侮、等の私心を去りて信じて疑はぬ心にならねばならぬ故に、

信心するものは第一に疑の雲を拂へよ、

と仰せられたのである之に反し神信心して右に擧げし雜念の雲あらば御蔭はなし、

神は如何に氏子を助け給はんと御思召し給ふとも、信心ならざる者には神の力に及ばぬ

ものぞよと、されば第一信念厚く眞の喜び一心の信仰をせよ、眞に有難き心に御蔭は現

はるゝものなり、

「眞に有難やと云ふ心直に御蔭の初めなり」

と諭されしなり、そこで其願ふ間には一厘一毛たりとも疑ふべからず

神は晝夜も遠さも近さも問はざるものぞ、頼む心に隔なく祈れ

疑を放れて信心してみよ、靈驗は我心にあり、祈りて御蔭のあるも無きも我心なり

と諭されたり、然らばいかにせばよきか即ち眞心になり案じる、疑ふ、侮る、恐れる等の雜

念を去り、無我無想の心の本體に立ち戻り眞心一心に専念絶る心をもて神に祈れ、教を

聞き信じ尊べ、敬神の心をもて恐るかつたとか、有難いとか、眞に恐れ入つたとか云ふ

心、あらためる心、安心の出来る心に、御蔭はあるのである、「神信心して靈驗のあるを

不思議と云ふまじき事、信心して靈驗のなき時はこれぞ不思議なる事ぞ

と確固不拔の斷案を下されたのである即ち、何も思はぬ眞に有難い信じて疑はぬと云

ふ心の本心、心のの本體、無念、無心、無我、無想の極に入りそれより絶る、頼む、祈る

願ふと云ふ方面に發したる一念一意は何者をも動かさないては止まないものである、無生

物でも生物でも萬事天地を動かし鬼神を泣かせて至誠神に通ずるのである、一念ですよ

専念ですよ、眞に有難いと云ふ、すがる心と教を守る力ですよ、古語に曰く至誠天に通ずと至言と云ふべし

● 第二

● 病の起る原因

病の起る原因は皆心神攝生の度をちがへし結果にして、心神を無理に用ひて苦悶し体を無理に使用すれば疾病起るものにて、多くは体の衛生を重んじ美食を用ゆる人あるも心の衛生を注意する人稀なり、心をして無理の思ひ過ごし無益の苦勞に費して、命を一日と短縮する者多し、注意すべきは身体を無理ならしめず可成的平和、換言すれば無益の苦を忘れて以て安心を興ふるにあり、

抑も病といふものは八九分は其ものゝ心から起るのである、決して他から來るものでない、自己の心より如何なる疾患も起るのである、

病は心より來ると云へば世人は大に笑はんそんな事がある筈はないと、然しながら能く熟考すれば否定すべからざるに至らん、萬病の起源即ち病の起るもとは八九分は自己の

心的動作に歸するものと云ふても差問へないと思ふ、之に就て中堂謙吉君の著、暗示法中の一節萬病起源論がよく適例である、しかも分明に説明されてありますから、今仮りに引用せん

人が外氣に觸れて非常の寒氣を感じたと仮定しなさい、其寒氣は自然が興へた暗示である其場合には、其人は寒さを感じて此様な寒さでは寒胃に罹りはせまいかと思ふ、さう思ふ瞬間は即ち自己暗示であつて更に一入の寒さを感じるに違ひない、其後幾分か逆上したり咳が出たりする時には、果して寒胃にかゝつたのだと云ふことを自信するのである、自信する迄は左程でなかつたが愈々自信した後には身体の状態大に變じて來て眞の寒胃となつたので有る、してみれば寒胃に罹る迄には種々の原因即ち寒い感じ又は逆上咳等の諸現象を綜合して、寒胃で有るとの自信を作り其の自信は暗示となつて生理的に寒胃を現はす事になつて來るのである、

流行病の蔓延する時、往々一時神系的症に罹つて遂に眞正症となり落命するものは非常に多くある、是は古來より醫師の實驗が多くあるから今更取立て、云ふ必要は

ないが是も亦自己の病身で有ることを自信して居るのと、病氣に罹りはせぬかと常に恐懼し疑怖して、心と腹が痛むとか胸が苦しいとか云ふ一の動機からさア病氣になつたのだと思ふ、自信が生理的動作を引起すので遂に眞正病となるのであることは分明するであらう、尙一つ肺結核の例を挙げよう今日醫學上の學說では結核菌が肺を侵蝕して遂に肺の機能を廢してしまふので有ると云ふのである、故に其菌を殺し其蔓延を防いで他の部分を保存すると云ふ療法になつて居る様である、又近來は酸素を多く供給して血液を新鮮にし、そして結核菌を白血液で包みまはす様にするので有るとも云ふ、氣候は温和な處で常に空氣の新鮮なる高地や海邊などを撰んで轉地療養することになつて居る、醫師の話によれば結核性肺患に罹り易い人は肉付きの薄い俗に云ふ病身な人に多いと云ふことである、そこで予は此の原理を説明するに第一に肉付の薄い病身な人といへば、其様な人は必らず「ヒステリー」で少しの事でも心配する性質の人に違ひない、前にも述べた通り我は常に病身であると云ふ自身即ち自己暗示が主因をなし居ることが分る、結核菌だとして直ちに肺の中にとび

込んで其の害を及ぼすと云ふても有るまい、若し其の様な強力な者であれば誰しも其病氣に罹らねばならぬ、或る人には入り或る人には働きを及ぼさないと云ふならば其菌の侵害力は比較的強烈でないこと、感受性の人は比較的皆病身の人で「ヒステリー」性であると云ふ事断定が出来る、夫ならば愈々結核性肺病になる迄には如何なる徑路を取るであろうか、予が信ずる所によると身体の状態が結核菌の繁殖し易い場合に其勢力を逞しふことになるのだと思ふ、仮令ば空氣中から傳染するものだと仮定して、茲に病身で病氣に感受し易い人が居る所が一度肺病患者と一所になつたと云ふ場合があると持病の「ヒステリー」は直ぐ自分は肺病になりはしないかと思ふ、咽喉がザラ／＼する益々咳く咽喉に激衝を起す其部分に熱をもつ其部分に痰を生ずると云ふ様に漸次に結核菌の宿り易い状態に導くので、長く其状態は繼續し蔓延し氣管支となり肺に侵入する様になるのだと思ふ、又或る場合には寒冷なる空氣を呼吸したが爲めに一時氣管に變狀を來し、夫れを氣にして居つて結核菌の侵蝕に適する状態に導びく様にする事もあろう、要するに以上述べし如き状態

が結核肺病を構成する様になるとしたならば、病毒の侵害も歸する所自己暗示が主因を成すもので有つて、遂には病膏盲に入つて又救ふ事が出来なくなるのでは有るまいか肺病患者は殆んど助からぬものと確信して居る、醫師も匙を投げる父母兄弟には厭かれ社會の人には指彈せられ、實に浮ぶ瀬がない自殺するより外に方法はないのである、社會及び其周圍はまだ死せざるに其死を吊し自己も既に精神的に自殺して居る肺病患者の十中八九斃れるのは最もの次第ではあるまいか、暗示療法は是等の病者に安心を與へ慰藉を與へ、居ながらに自然療法を施し臥しながら轉地療養をさせるので有る、衆人の認めて死と定めて居る病者も忽然として精神に爽快を覺え苦痛を忘れ滋養分を採つて着々身体の營養を促進し新陳代謝の自然理法を利用して九死の中に一生を得させることが出来るのである、

人は或は難ずるかも知らぬが君の擧げし一二の例は能く分るが、外科のことは如何で有るうか、例へば一つ腫物が出来ると思すれば夫は膏藥によるか切開しなければならぬではないか、如何にして暗示で直すことが出来るだろうと予は是等も矢張り自

己暗示によるものであると信するのである、顔面に出来る一寸した皰瘡でも氣にして常に掻きむしる様にすれば痒衝を起して(俗に云ふとがめられる)大きな腫物となる些細なあざを氣にして常に摩擦するが爲め漸次に廣がつて大きくなり、痒も黒子も氣にするが爲め漸次大きくなるのは誰しも知つてゐることである、されば腫物でも瘤の様なものでも黒子でも疣でも自己暗示、即ち精神作用によつて如何様にもすることの出来るのは勿論のことである、外科で切解するのは其腐蝕せられた部分を取り去るので、夫れからは自然の新陳代謝の理法を應用するに過ぎないのである、石炭酸水で洗滌するのは腐敗を豫防するに過ぎないのである、吾人が暗示療法で癩癧やこぶを取り去り、いぼや、あざを直すのも皆此の理法に依るのである以上述べた二三の實例で疾病の大根本は皆動機を自己暗示に起し、精神作用は生理的狀態を形作る様になると云ふことの大体を會得する事が出来ませう、

と實によく説きつくしてあります、之に依て是を觀れば凡ての疾病の起因は大凡自己暗示であると思ふても誤りてなかる、心即ち精神から病を醸するのであると思ふても一理

あると信ぜらるゝに至つたてしよ、よく熟慮し玉へ、如何に壯健な人でも何か苦慮する事があれば直ちに体に不愉快を來して飯も甘くない、従つて半病人の如くなるではないか、そのかはり精神快潤のときは心も体も何ともなく心地よく飯も甘く愉快に感ずるではないか、元來多血質の人は壯健で神經質の人が虚弱なのも乃はち一方は快潤なる精神故へ一層壯健になり一方は少しの事をも苦にするから猶体が弱くなるのである、肥満も出來の譯である、之れは精神其のものゝ相違を比較して見れば大に細分りになることと思ふ、そこで世間の人々よ第一苦を忘れる、何事も思はぬ、過去を悲しまぬ、萬事忘れると云ふ事が極めて必要である、されば物事時節任せにして、其の日くを樂しみ過ぎた事を思ひ出さずに無益の苦を求めぬ様にせば、滋養や何より其効は顯著であらうと考へらるゝ、

世の中の人は何も忘れぬと云ふ記憶術のかはりに、何も思はぬと云ふ忘れる方法失念術が大切であります

之を釋迦は煩惱と云ふた、苦と云ふた、神道は之れを罪と云ふた、穢れと云ふた、基督は我金光教祖は畏くも

明日の事は明日思へと云ふた、

物事に時節を待たず苦をすること、

と論されたり、この安心が出來たら心の本体にかへりて無我の位階に行ける、此の大々安慰が出來たら世の人々はどれだけ助かるか知れない、上來説き來つた如く病は重に精神より來るものであるとしたらば、大に此の理を悟りて安心の工夫をなし日々雜念を去らんとせねばならぬ、世に憔悴枯稿しているものを見るに皆苦をなして煩悶し自から体を破り命を一日くとちいめてある様に思はれる、偕て病は其大部分より來ると斷定し得たならば、其の心は身体のもとにして即ち物は心の表象である、心無ければ萬物なし其の心は命令部にして肉体がその命令をうけて活動するものとせば、心の活動は肉体を如何様にも變化せしむるものである、これこそ桑原俊郎先生の説を御覽になつた方は直に知られます、

されば心に暗示を興へ變化を起せば、病のもととなる心の變化するより病も變化するので

ある

体は影の如くである、其の物体の位置變動によつて長くも短かくも、どの様にもかはると同じ理である。

されば精神術の暗示なるものは根本的治療につき其の効果は物質的治療とは、どの位の差違があるかと云ふことが御分りであらう、されば茲に余は病の起る動機と題して聊か論じた次第である、信者たちよ早く斯道を求めて安心を辿り玉へ、安心の二字は萬病を治するもといである、心の病ひも治すのである、無病なることを得るのである、壯康なることを得るのである、

何事も無益の苦を忘れ玉へ、忘るゝの一字が出来たら心の本体に返つたのである、涅槃の域に入つたのである、

教祖の神訓に

我心で我身を生ずこともあり、殺すこともあり、

我心で我身を救ひ助けよと、

第五章

◎真道乃心得

(信條)

- ◎神國の人に生れて神と皇上との大恩を知らぬ事
- ◎天の恩を知りて地の恩を知らぬ事
- ◎幼少の時を忘れて親に不孝の事
- ◎真の道に居ながら真の道を履ぬ事
- ◎口に真を語りつゝ心に真の無き事
- ◎我身の苦難を知りながら人の身の苦難を知らぬ事
- ◎腹立ば心の鏡のくもる事
- ◎我心の角で我身を討つ事
- ◎人の不行狀を見て我身の不行狀にある事

- ◎物毎に時節を待たず苦をする事
- ◎壯健か時家業を疎にし物毎に驕る事
- ◎信心する人の眞の信心あき事

● 第一

● 道教乃大綱

- ◎ 今月今日で一心に頼めれば和賀心にある
- ◎ 疑ひを離れて廣き眞の大道を開き見よ我身は神徳の中にかされてあり
- ◎ 生ても死ても天と地とは我住家と思へよ

- ◎ 天にまかせよ地にすがれよ
- ◎ 神は我本體の大祖を信心は親に孝行するもれあじ事
- ◎ 神は晝夜も遠きも近きも問はざるものか信頼心に隔てかく祈れ
- ◎ 清き所も穢き所も隔てかく天地の神は御守り在るが我心に不淨を犯すか
- ◎ 表行よりは心行をせよ
- ◎ 大地の内に於て金乃神の大徳に洩るゝ處はあき事を
- ◎ 御地内をみだりに穢すかよ
- ◎ 今より何事にも方位は忌まず我教の昔に復れよ
- ◎ 我身は我身ならず皆神と皇上との身とれもひ知れよ

- ◎食物は皆人の命の爲めに天地の神の造り與へ給ふものぞ
- ◎神信心して靈驗の顯るを不思議とはいふまじきものぞ
- ◎信心して靈驗のあき時は是れぞ不思議ある事ぞ
- ◎我信ずる神ばかり尊みて餘の神を侮る事あかれ
- ◎信心する人の眞の神徳を知らぬ事
- ◎慾得にふけりて身を苦しむる事なかれ
- ◎四季の變りは人の力に及ばぬ事ぞ物事時節に任せよ
- ◎天地の事は人の眼をもて知りて知り難きものぞ恐るべし

●第二

◎信心乃心得

- ◎信心は家内に不和の無きが元あり
- ◎眞の道に入れば第一に心の疑の雲を拂へよ
- ◎眞に難有と思ふ心直に靈驗の始めあり
- ◎神徳を受けよ人徳を得よ
- ◎いきたくば神徳を積て長生をせよ
- ◎我心で我身を救ひ助けよ
- ◎信心する人は何事にも眞心にあれよ
- ◎眞の道を行く人は肉眼を置いて心眼を開けよ
- ◎神の恵みを人知らず親の心を子知らず

◎神信心の無き人は親に孝の無きも人の道を知らぬも

同じ事ぢや

◎我情我慾を放れて眞の道を知れよ

◎我心で我身をいかす事もあり殺す事もあり

◎大酒大食するは絶食の元にあるぢ

◎食物は我心で毒にも薬にもあるものぢ

◎何を喰ふにも飲むにも難有戴く心を忘れあよ

◎體の丈夫を願へ

◎體を作れ何事も躰が元あり

◎心配する心で信心をせよ

◎障子一とへがまゝあらぬ人の身ぢ

◎まめかとも信心の油断をすあ

◎信心は本心の玉を研くものぢや

◎若い者は本心の柱に虫を入らせあよ

◎まん心が大けがのものとあり

◎要心せよ我心の鬼が我身をせめるぢ

◎討向ふものには負けて時節に任せよ

◎過ぎたる事を思ひ出して腹立ち苦をするあよ

◎心で憎んで口で愛すあよ

◎信心する人は常に守りを心に懸けて居れよ

◎心に懸る守りは穢るゝ事は無きものぢ

◎我子の可愛さを知りて神の氏子を守りくださる事を

悟れよ

- ◎ 信心してまめで家業を勉めよ君の爲なり國の爲あり
- ◎ 不淨の有る時は先にことわり置いて願ある事を頼めよ
- ◎ 人の身が大事か我身が大事か人も我身も皆人
- ◎ 天が下に他人といふ事は無きものをぞ
- ◎ 蔭と日あたの心を持つなよ
- ◎ 縁談に相性を改め見合ひより信の心を見合せよ
- ◎ 家柄人筋を改めるより互に人情がらを改めよ
- ◎ 子を産むは我力で産とは思ふか皆大祖神の恵む處ぞ
- ◎ 懐妊の時腹帯をするより心に眞の帯をせよ
- ◎ 出産の時よかり物によかるより神に心を任せよかれよ

- ◎ 疑ひを去て信心して見よ靈驗は我心にあり
- ◎ 我身が我自由に成らぬものぞ
- ◎ 忌穢は我心で犯す事もあり拂ふ事もあり
- ◎ 祈て靈驗の在るも無きも我心あり
- ◎ 嬰心は前から倒れぬ内の杖ぞ
- ◎ 悪い事をいうて待つあよ先を樂しめ
- ◎ やれ痛やといふ心で難有靈驗をといふ心にかれよ
- ◎ 神の教も眞の道も知らぬ人のあはれさ
- ◎ 神は聲もあしかたちも見えず疑は限りあし恐るべし
- 疑ひを去れよ
- ◎ 眞心の道を迷はず失はず末の末まで教へ傳へよ

人は大天地より出て、小天地たるの資格を有す神靈は幽にありて身を司る形體は地あり元一あるもの大と小とに分れ大理は小理とありしかり是を以て顯幽感通は小理を以て大理に合するもの小神靈を大神靈に接せんとするものあれば人の神零にして清淨あれば宇宙の神零と交通すること自由たるに至るあり

(天地乃大理)

第六章

●金光教に對する余の感想

宗教界の支離滅裂未だ今日よりも甚だしきはなかるべし、論難攻撃紛々擾々底止する所を知らず實に我國は宗教界の博覽會なりと外人の評したりしも亦宜なりと云ふべし、曰く天台(三派)、曰く真言(二派)、曰く禪宗(三宗十派)、曰く淨土(二派)、曰く真宗(十派)曰く日蓮宗(八派)、曰く時宗、曰く融通念佛宗、これ今日の佛教ならずや、曰く神道教會曰く神宮教會、曰く大社教會、曰く扶桑教會、曰く大成教會、曰く實行教會、曰く黒住教會曰く修成教會、曰く神習教會、曰く御嶽教會、曰く天理教會、曰く連門教會、曰く杖教會曰く丸山教會、これ世人の所謂今日の神道ならずや曰く、グリークチャーチ曰く、ローマンカソリック曰く、プロテスタントチズム曰く、日本聖公會、曰く日本メソヂイスト曰く、カナダメソヂイスト、これ今日の耶蘇教ならずや、

あゝ實に其教派の多數にして共に反目疾視目して、非となし評して邪となし其の相競ふや今日より甚しきはなし、今や將來の宗教てふ大問題は幾多の愚者哲人の研究は幾點と

なりおれり、余は今これを比較論評をなすものに非らず、他日を期して自己の所見をのべんと欲すれども、それは暫くおき而かも我國は開闢以來三千有餘年の歴史を有し、世界無比の國と誇れども未だ大政治家なく、大宗教家なく、大學者なく、大文學者なく、大實業家なし、皆島國的にして世界的偉人稀なり、殊更に宗教家に至つては未だかつて、日本的直覺天才を出したるとなし、それ宇宙の人類個々の心靈界に於て靈的生活の中心となり居る三大聖人と稱へらるゝ釋迦、耶穌、及び孔子はいづれよりおこりたる信徒四億万を有し理想教として社會を風靡せる佛陀は雪山のほとり「マカダ」國に生れたり、天使として唯一眞神を見出し愛の道を説かれたる耶穌は亞細亞の西方「ジェルサレム」に呱呱の聲を擧げにき、孔子又決して我國の産に非ず「マホメット」何れの人ぞや、悲しいかな武を以て立ち徳を以て起り世界を統一すべき一大天業を負へる我國は決して一回たりとも大宗教家大聖人を出さざりしなり、

果して我國は將來に於ても直覺的天才に見捨てられしか、古來高僧なきにあらず、曰く最澄、曰く私法、曰く道元、曰く榮西、曰く法然、曰く親鸞、曰く日蓮、其他枚舉に遑まあら

ず、此等の宗教家は皆悟道の人なりと雖も皆佛の流を汲み道を究め佛典によりて悟り佛教を染傳したるに過ぎず、眞に自ら直覺し佛によらず又儒によらずして一大宗教を説かれたるにはあらざるなり、或は儒道の流により高遠の眞理を究め、社會に功獻せし大學者なきにあらざるも、一種の東洋哲學者としての價值はあれども、皆世界的宗教家たる者一人もなし、これを神道各派にもとめんか、悲しいかな多くは國家的宗教の範圍を脱せざる小宗教なるを如何にせん、今仮りに十分なる同情をもて各派を見るも、宇宙人生に關し普遍的大乗教理に於て到底佛教に及ばざると數千里、キリスト教にも劣ると數百歩なるを悲しむ、あゝ遂に我國には一大聖人を出す事能はざりしか

由來富嶽の琵琶湖の艶を以て誇れる、神州の民一人として大宗教家を出す事なく眞に憐むべき國民なるかな、否な然らず余は幸に日本よりして一大救世の主を出したるを認むる事を得たり日本開闢以來初めて一大偉人の我島根國より生れませるを見出せり

抑も一大救世の主とは誰ぞや、余は告げん須く眼を南日本備中大谷の里、木綿崎の麓に注げ、必ず一種の靈感にうたれ光明の光りを見出すを得ん、抑も誰ぞや曰く金光大神

抑も教祖金光大神は草莽の一布衣より起り唯心行により甲に習はず乙に學ばず佛によらず耶に取らず自ら悟り自ら教へ自ら宣教せられし大宗教家にして三聖未見の大真理を得ずし文字を知らず書を讀まずして而かも大哲理を直観し玉ひこゝに一大世界的大宗教を開き玉へり、それ大宗教家たる者は學問以外文字以外生れながらにして遠觀し先天的直覺なり、決して古人の唾沫をなめ、受賣をなし初めて悟りしに非ず、如上の如く教祖は獨り三昧に入り顯幽感通の徳に進み玉ひ、天地の神と冥合渾和し、神の位置に進まれ、教祖獨得の名教を立て玉へり、其の教たるや社會的の一大教理にして宇宙人生の極致、天地の大聖人生の本務神人の關係修行の本旨死生の安心、信心の妙諦悉く説破し盡され、簡簡にして旨深く、其中には個人の安心立命も國家の教義道徳もみなながらに備はれり、實に佛耶二教と相並て炳焉たり、嗚呼實に尊むべき生神なるかな、如何に異教徒と雖も一度教祖の遺教を繙かんか、必ずや信ずると信ぜざるとを問はず、其の一大宗教家たるを是認するに到らん、余不才なりと雖も日本史上自ら悟りて平等的世界的の一大宗教を開かれたる教祖を金光大神以外に見出す事を得ざるなり、然り教祖は我國唯一の大宗教家として

出て玉へり、深く信ず近き將來に於て教祖の光り世に出づると共に必ずや一大聖人として世人に渴仰せられ「ヒストリー」の頁に四大聖人の記録を止むるに至らん、若しも世人をして教義の真髓を仰がしめば總ての外道者をして兎に角一大偉人視せしむる事必せり未だ立教日淺く世人知らざるが爲めに注意を拂はざるのみ、

教祖神去りまして後二拾有餘年教務の擴張實に驚くべきものあり、信徒百萬を超へ教會所の數三百餘に達し教師の數千以上に上る實に盛なりと云ふべし然れども前途尙遼遠なり一層信徒たる者自覺奮勵益々教祖の御心に添はざるべからず、抑も宗教の歴史を繙くに初めは必ず何れと雖も神話の時代を経ざるなし初めより現今の如き普遍的理想的なるものには非らざりき、即ち天然崇拜動植物崇拜呪物崇拜生殖器崇拜等に其主体を求め國家的より社會的に遷り多神教より唯一神教に遷り以て高尚なる理想教にまで發達し來りしものなり、されば支那太古の宗教を見るに皆山川崇拜なりき、キリスト教の如何に普遍的なりと雖も其以前に於てはイスラエル民族の主とする「ヤーブエー」の漸々發達し來りしものならざるべからず、釋迦の道如何に高遠なりとするも亦吠陀の天然崇拜多神

教の漸々發達し來りし最後なりき、嗚呼古代吠陀の讃誦、デボラの國風ソロモンの愛歌を初めとし「トテム」崇拜、呪物崇拜自然崇拜又は精靈崇拜は野蠻劣等未開なる上世の一度は取りし過程の片影なりき、斯の古代希臘の多神教は遂に「ツオイヌ」の一神に歸向し猶太に於ける偏狹的、國民的一神崇拜より一轉して「アモス」「セホア」「エレミア」等各豫言者の普遍的唯一神を胚胎し再轉してクリストの世界的宗教を醗酵し、印度に於ける吠陀の交替神教は「ザバニシアド」の自由志想となり「エダアンタ」の唯心論的、幻妄論は沈痛其極に達し、婆羅門の禁慾主義や轉輾して佛の無我理想教を釀成し來りしものにして之れを分てば、

一、多神教 多くの神を立るもの

二、一神教 宇宙外に一つの神を立つるもの

三、汎神教 宇宙其者を神とするもの

にしてこれを自然教 顯示教に分ち金光教の如きは顯示教に屬し一神教の如くして汎神教、汎神教の如くして一神教、離せず同せず事理無礙真に一大宗教なり、

日露戰役後、百事益々發展の域に進み殊に精神界に於ては一層の煩瑣を増すの時如何に名教たりとも斯道布教者の如何によりて消長なきにしも非らず、一層大奮勵を要するの時代なり大修養をなすの秋なり、將來の宗教に向つて或者の言を借りんに

一、將來の宗教たるべきものは時代智識と適應するものならざる可らず、

二、單に時代智識に適應するのみならず別に宗教としての眞價値なかるべからず、

三、一般道徳並びに國民道徳に背反するものなるべからず、

四、實際道徳の活力たるものならざる可らず、

五、布教傳道その宜しきを得ざる可らず、と至言と云ふべし

亦吾人教信徒たらん者は、一層三省し心を磨き徳を積み小なる靈驗のみに迷ふなく大真理に向つて向上猛進し、智を啓き心の本体を認め神人合一の境地に至り出で、は本務を盡し社會の爲めに模範となり、教祖の名を擧げ幾分たりとも報恩の方一に酬ゆるの心掛なかるべからず、凡そ世の信心家なる者を見るに單に眼前の靈驗をのみ目的とし、又之れに満足する者多し、もとより幸福繁榮を望み無病息災を望むは人生の至情にして、こ

れ信心のある一部の目的なり、宜しく信心して幸福健康を得るに勉むべく、又願はざるべからず、然れどもこれ果して信心の眞の目的なるか、神を單にかゝる靈驗示現にのみ能なるものと考ふるは誤解の甚しきものにして信心の本旨に遠ざかり、むしろ迷なり、

● 信 ● 心 ●
● 眞 ● 心 ●
● 神 ● 心 ●

神人 と説かれ所謂信仰の大目的は神人合一大悟徹底を究竟とす、宜しくあやまつ事勿れ俱に廣大なる神蔭を被むりたる吾人は、益々本心を磨き以て教會長の教諭に背かざらんことを期せよ、 嗚呼この大眞理によりて初めて宇宙の理を悟る事を得たる百万の教の徒は一齊に立ち、一日も早く此の生神金光大神日本未曾有の大偉人を天下に知らしめ以て報國救世の一助ともならん事を希ひ努力すべし、これ金光教に對する吾人の感想なり幸に微意のある所を諒せよ (終)

神 訓 集

第七章

● 神訓集

- 御蔭を戴けば喜び御蔭を戴かねば悲しむが、戴けるも戴けぬも元がある
- 人の親は我が子が可愛いと申しても便所の中迄の心は盡して下さらぬ、天地の神は何れたりとも御守りあり
- 世の中の事は益のない心配をするな、今日今日を樂んで信心せよ
- 信心に友はいらぬぞ
- 吾れ助かりたくば人を助けよ
- 人には間違ひあり神には間違ひなし
- 唯理窟のみ云ふ人は御上には役に立つけれど神様には理窟ばかりではいかぬ、實意可憐誠心が第一なり
- 禍は下から、上を助くる人はあり下を助くる人は無し、金光大神は下を助け給ふなり
- 産上の神を祀る人は有るが天地の神を祀る者がない

第七章

● 神訓集

- 御蔭を戴けば喜び御蔭を戴かねば悲しむが、戴けるも戴けぬも元がある
- 人の親は我が子が可愛いと申しても便所の中迄の心は盡して下さらぬ、天地の神は何れたりとも御守りあり
- 世の中の事は益のない心配をするな、今日今日を樂んで信心せよ
- 信心に友はいらぬぞ
- 吾れ助かりたくば人を助けよ
- 人には間違ひあり神には間違ひなし
- 唯理窟のみ云ふ人は御上には役に立つけれど神様には理窟ばかりではいかぬ、實意町
神誠心が第一なり
- 禍は下から、上を助くる人はあり下を助くる人は無し、金光大神は下を助け給ふなり
- 産上の神を祀る人は有るが天地の神を祀る者がない

○此世へは稼ぎに来たのじや、目をふさぎ物を言はぬ様にならねば樂は出来ぬ

○天地の神に社はない又道を教ゆる人がなかつた、神は形はない信心さへすりや樂じや
○信心の初めを忘るゝな、

○祈れ藥と云ふは悪し、藥祈れと云は、樂じや

○神様に供へて戴く心でやれば樂じや、皆人が食べる心で食べる神様に食べさしてもら
うと思や樂じや、

○神は叱りはせぬ、氏子から叱られるな、

○神様に叱られても頼め、神は叱る役ではない、助けなさる役じや、叱られても頼め聞
て下さる、

○子が親に叱られても叩かれても、親は叱りながら膝に抱きあげて乳を飲ます神様も同
じ事しかられても押して願へ聞き届けて下さる

○神に御禮は人を助くるを専一にすべし、

○皆人は虫の知らせじやと言ひますけれど、腹の中にそんな賢い虫は居ませぬ

○昨日の事を憂へず今日に氣を付けて明日を樂しんで暮せば樂じや、

○人心を去りて神の心になれ、人心を出して神の心を失ふな、

○脊中の子が泣けば守が泣きます、守が泣けば脊中の子も泣くわい

●神に頼めば頼むだけの御蔭はやるが、一分ちがへば一分ちがい、二分ちがへば二分ち
がつた御蔭より戴けんわい

○十の善い事をせよと思ふに及ばん、一の悪い事をせぬ様に心得よ、

○今の様では氏子が助かる様でよう助からぬ、手付流して助からぬ、手付流さぬ様によ
く注意せよ、

○我行を天地の鏡にかけて耻ぢぬ様にせよ、我れから受くる苦は教にて助けてやる天命
にて受くる苦は神に願ふて取つていたけ

○神を静める事は知つて居りますけれど、心の神を静める事を知りませぬ

○世話係り世話係りと云ふても神様の御世話係りじや

○吾れが高い處へ上れば人が下します、低い處に居れば人が上げます

○家内三人あつたら四人と思へ、四人あつたら五人と思へ、一人は金光大神を相談相手にせよ、

○師の恩初め目口を付けられし時を忘れな、

○天地の神はなあ罰を當てる間があれば信心する者に御蔭をやらねばならんから、罰を當てる間がないわい、

○壽命のある死はさせじ天性の自由を得せしむ、

○神様の結構を知つたら信心せねばならん、信心さへすれば神様も悪ふはなさらん

○人にもたれるか、人は死ぬ事があるが神は死ぬ事はない、

○今月今日其日其日の信心を怠らぬ様にせよ信心の切れ目が出来ると御蔭の切目になる

○氏子頭打つて血出さぬとわからぬわい、

○信心はたらいの水を押すが如し、

○肉體の煩ひを取り、心の煩ひを取るものがない心の煩ひを取れば病氣はなほるものじや

○天地の大神様は親神なり人は氏子なり、

○普通作事或は縁組み轉宅するに、天地の大神に御守りある様と御願ひ申すがよろし

○信心すれば御方角は自由になる、御願を爲してさして戴けば樂じや

○天文學者は一年前の曆を作つても神様の御蔭は知らん

○病氣の時、藥を飲むに神様より戴く心にて飲めばよくきくもの、又七日間飲みてさかねば病にあはぬなり、

○正月三日の内に體を作れと教へあるは鯛を食するに非ず、家内和合して喜び喜びて食物を食して體を丈夫に作れとの事

○蒔かぬ種は生へぬと云ふたとへあり、よき種を蒔けばよきもの生ゆるなり、自分が種を蒔かねば生ゆる事なし悪しき種も同様なり

○各信者は正直實意丁寧を元として信心すれば繁昌するなり先生たちは祈しい、あしい、に・く・い、か・わ・い、と云ふ事を放れて信心すれば樂じや

○人は神の作り給ふものにて即ち御靈は神の分ち給はりしものぞよ、

○萬事の繰り合せを願へ、

- 百人の不信心者より一人の信者がよいぞ、
- 若い時の信心は年寄りての楽しみ、
- 願へよ願わせよ、
- 人にもたれて神の御蔭を踏すなよ、
- 信心もせずあせりまわりて貧乏の上に難儀をする人は人にすぐれし因果者なり、
- 神に絶りて難義を脱がれ福德を得るは人並すぐれし仕合せ者なり、
- 信あれば徳ありと云ひながら、信心をさらひ損をする事を好む人が多し、
- 神は氏子が徳さへ取れば喜び給ふなり、氏子損になる事は第一神のさらひ給ふなり、
- 不義の富貴は神の御心に叶はず、
- 出世繁昌がすぎなら神信心せよ、出世繁昌がさらひなら神信心するに及ばず、
- 氏子信心をして心配をすな、心配は神にまかせよ、
- 拜まずに眞實で頼め、
- 目先の親は産の親なり、身體と靈魂との親は天地の大神なり、

- 神誠を守るは本心の洗濯なり、心に穢れなければ凶事出来ず、
- 柿は年に三寸のびても大木あり、桐は年に三尺のびても大木稀なり、
- 病の傳染より心の傳染に注意せよ、
- 神誠をよく聞くものとはよく實行する人を云ふ、よく聞いても行はざれば聞かぬが増しなり、聞いて行はぬ者は教を穢す人なり、
- 自分の願より人の繁昌を願ふ信心をせよ、
- 子の頭をはるより自分の頭をはれ、
- 神の教の有難い事を一旦悟つたら死んでも忘れはせん、途中で忘れる信心は眞の有難味が未だ知れんからである、
- 時節時節に身をまかせて時の法度にそむくべからず、
- 廣間が遠ざかると御蔭の落し初め、
- 一心になれ釣瓶で水を汲む如くに御蔭があるぞ、
- 人が捨てても神が捨てんぞ、天地の神を疑ふて何が誠じや、

- 氏子信心しても生花の信心すなよ、花は咲いても實にならんわい、
- 氏子櫻の花の信心をすなよ、梅の花の信心をせよ、櫻花はなあ日本一の名花でも散つたら人が喜びはせんぞ、梅の花はそれ程に珍重がらねど實になるわい、實を取りて鹽漬けにせば幾年でも人が喜ぶわい、
- 氏子信心するならなあ、石垣に石を放つて見なされ、さつくはうればこなたへ戻るじやろう、そつとほうれば戻りやせんぞ、
- 氏子道こしらへよ、御蔭は神がやるぞよ、
- 釋迦も神なら耶蘇も神、天地金の神は其神の親神じやなあ、
- 皆人はあの筋この筋と云ふけれど、あのすじこのすじと云ふ事はありません、皆親は一筋じやなあ、
- 皆方除けをするけれど除ける事は出来はせん、大地を離れたのでなければ除けたのではない、
- 兩手で物は出来ませんなあ、

- 腹立つ人は四ツ足じやなあ、物の云ふ事も聞きわけもないなあ、
- 人に生れて四ツ足に助けて貰ふ人がありますなあ、
- 教會は野中のせんちじや、用事があればよる用事がなければよりません、
- 教會は搦鉢じやなあ、信者は芋であります、洗ふて居る内に飛んで出ては奇麗になりません、
- 氏子病の根を尋ねてもよいなあ、信心の根を尋ねりや樂じや、
- 神様は物を仰しやらん、姿も見えずたよりもない其便りのないのがたよりになるわい
- 一眞一心になつて信心すりや天地覆るとも御蔭をやる、
- 日々笑つて暮せ、
- 人を解剖する人はあれど人を作る人はありませんなあ、
- 藁人形の様なものでも親は親じや、親を親とすれば神は御蔭をやる、
- 氏子神に御膳供へると云ふ心なら供へずに置き、神に供へると云ふ御氣障りあり、供へて戴くと云ふ心になれ、

○氏子信心すると云ふ心には御蔭はないぞ、信心として戴くと云ふ心には御蔭はあるわ
 ○氏子商賈すると云ふから神は見えて居る、商賈として戴くと云ふ心になれ、神はつきま
 とふてやる、

○ある人は鬼じやと云ふけれど、云ふ者が鬼じやなあ、

○人が生れるに暦を見て生れる人はありませんなあ、また死んで行くに長の旅をすると
 云ふて暦を地で行く人はありませんなあ、すりやあ世の中の事はわからんなあ、

○御かけ戴かする者はなあ願ふて居ると云ふ者はあるけれど、一代信心せよと云ふて致
 へる者がない、

○遠くまで参拜せいで、其土地其土地の教會へ絶つて御かけ戴け無埋をして遠くまで
 参拜すると旅費が入ると云ふ病氣が起きます、

○人々は櫻の花を見に行きますが、木の根を見に行く人はありません、

○正月一日には早朝に参拜して一年中の事を大神様へ御願せよ、月々の晦日には月の中
 の御禮及び御無禮の御詫を申し御取拂ひを願へ、

○昔人は鬼門を除けると云ふけれど、世界中の鬼門じやによりて除けられはせぬ、皆迷
 ひじや

○或人が雪隠を建てたいけれど西の方が三年ふさがりであるから建てる事が出来ずこま
 りますと申し上げしに

おまへは西の方の田地へ肥をやるじやろうなあ、御願ひ申せば器支なし、

○覺へなき事は心配はない致祖の神はなあ首斬りに人の來ましても首を出したら斬つて
 行く事が出来なんだ、人は役年じやと云ふけれど、病み煩ふのが厄じやなあ、

○金光を大谷の肥えかつぎじやと思へば御蔭がないのじや、遠國の人は生神様と思ふて
 敬神するから御蔭を戴くのじや、

○疑ひを去りて何事も天地金の神に絶れよ、

○如何に我子が可愛いと思へども親の心にそむく者は救ふ事が能はぬものぞよ、

○親に不孝をする子は親の心には憎可愛き者ぞよ、

○神は如何に氏子を助けんと思召し給ふとも信心ならざる者は神の力にも及ばぬものぞ

- 神國に生れ信心もせず誠の道知らぬは猶神の御心には可愛き者と思し召し給ふぞ、
- 實意が五分、町幅が二分五厘、正直が二分五厘、
- 信心は家を治め身を保つもとである、
- 竹や櫓の杖は折れる、天地金の神櫓の杖は折れもせずまがりもせず、
- 何時も元日と思ふて暮せよ、家の掃除より心の掃除、
- 拜むより行ひをせよ、
- 口で信心致しますと申す者には誠の心の人がまあ無ひなあ、
- うれしがる氏子はありますけれど喜ぶ氏子はありません、
- 氏子暇を取るとも又あやまつたらゆるしてやる、神から暇を出されると氏子何程願つてもいかん、
- 日々神に孝行の信心をせよ、
- 何一つでも國の爲めにならない、人も國の爲めにならないやいかん、
- 信心は我心より直ほしてかかれ、

- 先へ心を寄せ信心すれば手元の信心がゆるむぞよ、
- 信心は初めの事を忘れなよ、神は捨てぬが氏子捨てなよ、
- 金光は神を拜めと仰しやりはせん信心せいと云ふに、人はすぐに拜む方に力を入れて信心が薄くなる、
- 金光大陣の教の舟に乗れよ、人の口車や尻馬に乗るな大怪我をするぞ、
- 御靈験を買りに行くな御靈験を落すぞ、
- 神信心せよ壽命のある死はさせぬ、
- 信心は辛抱が第一、
- 神に守りいらぬ、氏子の守りを大切にせよ、
- 子を杖につきなさんな、
- 金光大陣ありて天地の神が世に出たぞ、
- 天地の神に形はないぞ、
- 我身を草紙にして人の教を受けよ、

- 氏子の取扱ひに不同をなすなよ、
- 病疾は醫訓でなほるが病氣は醫者でなほるまい、
- 何でも好きなものを慎めよ、
- 金光大陣は病氣をなほすのではない、心をなほす神なり、
- 如何に年老ひたりとも脛腰の立つ間は働きつとめよ、
- 形あるものは必ず勞苦あり煩勞を厭ふては神にはなれんぞ、
- 金光大陣の身體は攘はしてないぞ、
- 眞行をせよ直に御蔭になる、虚行なら止めとけ、
- 心の疑りを除いての信心ならせよ、眞に御蔭になる、
- 宮や寺は死んだものじや、參詣しても御蔭は取れまい靈驗がはしくば生神に絶れよ、
- 心がさわく／＼しては靈驗は受けられんぞ、
- 御秘の言葉は神様に奉る爲めのものではない、我心の忌み穢れを拂ひ清むる爲めにしたものである、

- 御秘を千百遍あげても心にわきまをななければ神様の御感應はない、
- 世間でする御祈禱は過ぎた事を考へ出して却つて病氣を増す事が多い、
- 天地の大神は天地有らん限り、唯一なり、外の神は年々にふゑるぞ、
- 氏子が神を忘れさへせねば神も氏子を忘れぬ、
- 飾りは年中引くものでない、節期に飾を引く様な仕末では拂ひが春に残るぞ、
- 拜めとも參れとも願をかけよとも何上げよとも云はん唯眞の信心一をなせよ、
- 口や手は水で洗はれるが肝心の心は何で洗ふのじや實意丁寧で洗はねば穢は取れぬぞ
- 實意がなくなれば誠の信心は出来んぞ、正直丁寧は手足で眞實は身體である、
- 天地金の大神は雪隠の中にもあられる、然れども物を言はれんから金光大陣を以て敬へ下さる、
- 腹を据へて信心をせよ辛抱せぬ者は御蔭を受ける事は出来ん、
- 鐘は打ち破る心でつけ太鼓はたいき破る心でたけ破れもわれもせぬ其者の力一つで天地に鳴り渡りて見せるぞ、

- 地震より自身の變動が大切なり、
- 信心は甘言を倒に噛むが如し、
- 人の行をそしる時、我信心の下りし時と思へよ、
- 功徳とは唯物を施してやるばかりでないぞよ、人がつばをかけたらふいて返せ、拳固をくれたらさすつて返せ、
- 我家内にはほれ我家業にはほれ我處にはほれよ此外にはほれたら大怪我をするぞ、
- 信心は稲や麥に肥料をする様なものぞ、植へつけ時から夏の間にして置かねば秋になつて穂の淋しさをなげくも其功はない、
- 何事を願ふにも心をきめて願へ、
- 一度願ふた事は變るべからず、
- 神様は氏子が悔悟して誠を悟れば直に御赦し下さる、然れども氏子が我心で赦さぬ事が多い、

○御無禮を御無禮をと心をいたためて祈念するより、此大道に引き入れて下されたのを喜

びて、猶此上に眞の信心をさして下され、知らず知らずの御無禮を御赦し下されと喜び勇みて心よく潔よく御禮せよ、

○死ぬ用意をすな生きる用意をせよ、

○油断すな後の鳥が先になるぞ、

○人の義理より神の義理を思へ神の義理を盡せば人の義理は自ら立つ、

○慾心と慢心が出易し、これ第一の病み煩ひであるぞ、

○生きとる内に神になり置かずば死んでも神になれぬ、

○世に人を助けたら死んでも祀られるぞ、

○御蔭は世間になし我心にあり自分が神なり

○御蔭の花のみに迷ふて實を取りはずすな、

○信心せよ其の道其の家業に繁昌をさしてやろう何の家業がよい悪いと云ふ様を別選みをする狭い道ではないぞ、

○一日拜まざるとも片時の信心を油断すな、

- 御蔭を受けたら其事は忘れはすまい、其受けた御蔭を手本にして人を救ひ助けるが大
神への御禮と思へ、日夜絶えず戴く御蔭に物上げて御禮をする事ばかり考へたら悉
皆あげても猶御禮には不足なり、
- 廣大なる御神徳を狭く廣大なる御神訓を狭く説かぬ様に心を付けて教へ導けよ、
- 此道につかへる者は常に武士が妻子を捨て、戦場に向ふ事を考へよ、
- 願ふ事があつて参るとも何を持つて参るに及ばず、唯眞の一ツを以て参れ、
- 人を助くるが神なり神なる身を以て神の道を守らぬにより人を助ける事が出来ぬ、
- 受くるも捨つるも心からなり、
- 人に盡すな神に盡せ、
- 神はどう云ふ神だと問ふたら、天地の神じやと云ふてやりや樂じや、
- 眞一心になれば人智を以てはかるべからざる御蔭があるぞよ、
- 神にも道があるぞよ、道を傳へんとして信心すりや樂じや、
- 人の一寸は見へても吾が一尺は見へませんな、

- 氏子神は手付けをやるぞ、其手付けを流さぬ様にせよ、
- 大稔をやるより月に一度の心の大稔をやりやよいなあ、
- 世話係りも信者のする事を見てするがよい、
- 信心は一代じやから今日より心配をやめて頼め絶れ、
- 凡そ物は皆下から生へます、下を見ずに上を見て歩かうとしますから、物につまづい
て怪我を致します、
- もうよいと思へば直に地獄道、鬼の來ぬ間に洗濯をせよ(二代様御理解)
- 皆來る時は神に願ふても歸る時は神をほつて歸ります、

● 十二條の裏

- 一、我身の壯健を願へ
- 二、萬事の繰り合せを願へ
- 廣前へ苦しと頼みに來た時は、大家小家の隔てなく願ひ届けよ、
- 天地の神は清き處も不淨の處も隔てなく御主宰あり、

- 慾心を起して道を穢すなよ、
- 慾心は禍を招く基ひなり、
- 徳の受場を忘れて人の徳をへさぐなよ、
- 徳は天地の神より満ち来るものぞや、
- 人の徳を見下げて我徳を見上げよ、
- 低きは上る高きは下る事のあるものぞよ、
- 廣前の場所津をあらぶなよ、願ふ心に場所も津もある、
- 天地の神は大小の隔てなく御守りあるものぞ、

● 神訓

- 御取次するものは花活けじや、牡丹の花も活けにやならぬ、又薔薇の花も始終水を換へにやあならぬわい、
- 御話を頂くにも聞き様がある、底ぬけと味噌こしと袋耳と申して三ッあるそうな、
- 塵ほこりのある家も住み手によりては錦と見へますなあ、

- 三年のふさがりと云ふて除けて普請をするが今度目に、めぐりくつてふさがると、どうなるかと尋ぬる人がないなあ、
- 唯一日だけよき日を見てあとの事はかまわんが、若しも日を選んで普請をするなら悪い日が来れば家をこわらねばならぬ、それはようせまいなあ、
- 皆一心になりて居ると云ふけれど好きな事に通ふ程一心によくなりませんなあ、
- 皆性分と云ふけれど性分と云ふものはありやせん、皆我が儘じやなあ、
- 皆方角を除けようとするけれど除ける事は出来ぬ、天地を離れにや除けられません、皆方除けを頼むけれど同じ頼むなら守つて下されと頼めばよいなあ、
- 眞心で信心する家へは廻つてやります、
- 神様を拜むのは一度じや、信心は一代じやからなあ、
- 寒中に水をあびて行をするのは二十日と三十日との日が極まつて有るから樂ぢや、夏は涼み冬は炬燵に當つて御神號を唱へてある様なが一生ぢやからな、
- 天地の神様が日々夜々刻々に腦髓に守り見て御座ると思ひ暫時も忘れん様にするが心

にかける守りぢや、

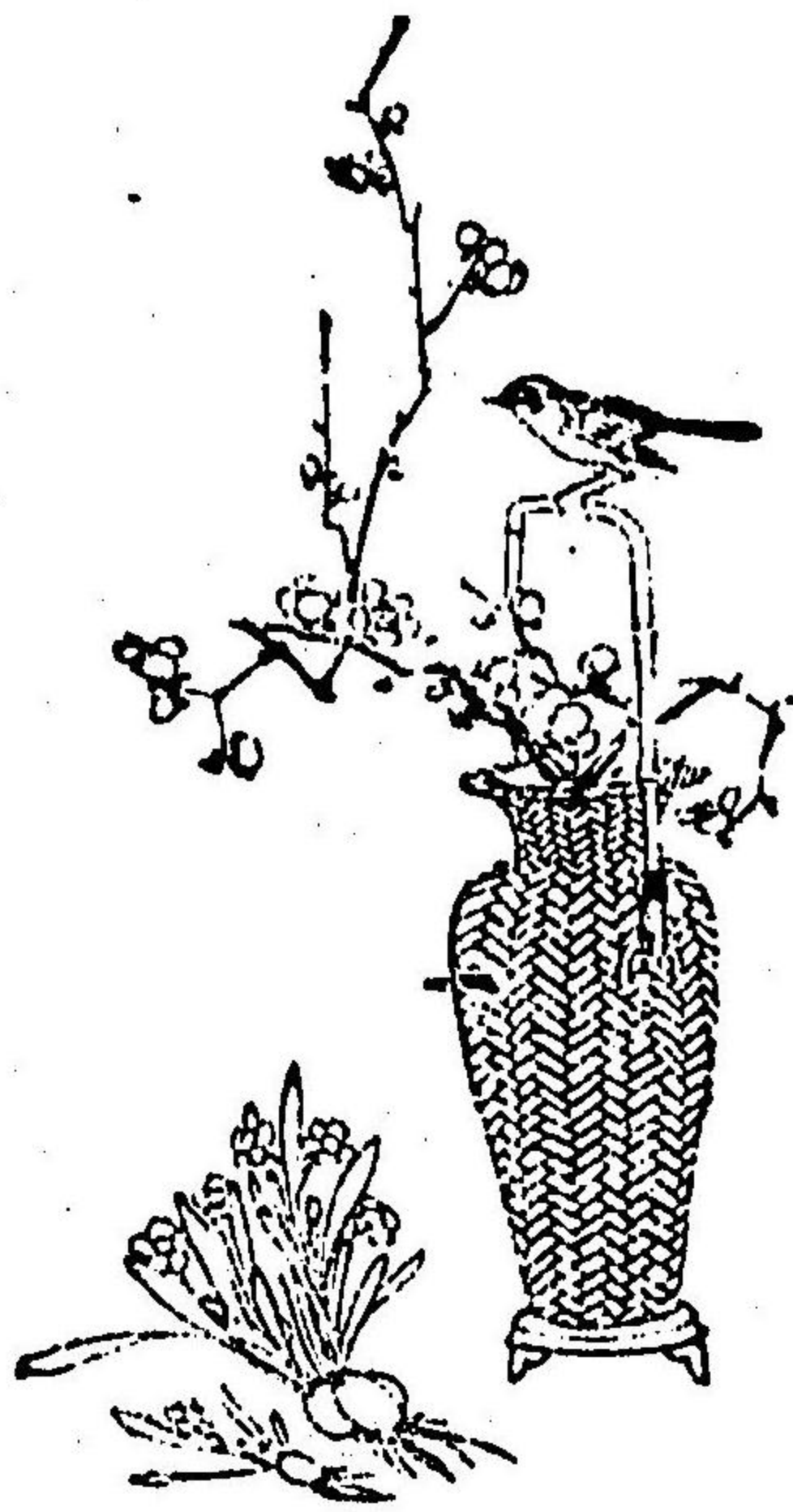
○信心は字に神の心と書ひてもシンジンと讀める神の心になれ、
○神人と書いても「シンジン」なり神と人と一つになれ、

右は三千餘訓中を抜抄したるものなれども此他神訓幾何なるを知らず如何にせん、

出版を急ぎしと及び寸暇なき爲め一と先づ稿を終ることゝなしぬ、然れども再び訂

正増補をなして他日讀者に至高深遠の神訓を悉く編述し或は項を分ち部を改め再び

大部の者を著さんと欲す、先づ其端緒と思ひ給ひ將來の再刊を待たれんことを、



◎ 稜

由來菲才繁忙の身素より杜撰見るに一顧の値
あく却つて識者後人の笑を招くに過ぎず、且つ
神誠たるや 吾教祖 金光大神顯幽感通遊ば
され、初めて神宣を蒙り此に立教傳導せられし
より以來數十年、機に觸れ折りに應じ詢々とし
て單言隻語教諭せられし者あれば、其數幾何あ
るを知らず、又四神貫行の君の神訓あきにし
もあらず、然かも之れを蒐集せんとするには從

つて凡ての諸先生に就き之れが教へを請はざれば完全に近きものを編述すること不可能あり、且つは一言一句とて字章に誤謬等無きを保し難し、さればかゝる錯誤は一に編者の責にあり、只讀者中之れを緝かんものゝ多少とも信仰の道程を高め眞理の靈光にふるゝの一助ともあらんには余の望外の幸ひあり、請ふ諒せられんことを、

教義叢談 (終)

7	頁	十	行	眠 <small>誤</small> つり、	眠 <small>正</small> りつ、	59	九	智 <small>を</small> 見て	智 <small>を</small> 以て
11	九	者	家			60	十二	幸 福	幸 福
11	十三	天の地	天地の			62	五	絶るを	絶ると
13	九	農 布	農 夫			71	八	大部分心の心一字脱漏	
22	九	奉 祝	奉 祀			80	七	見合ひ	見合ふ
27	十	是れこの	是れこそ			82	七	神 器	神 器
27	十三	崇 敬	崇 敬			82	八	神 器	神 器
48	十二	靈験のなきと	靈験のある			83	四	淨 土	淨 土
50	二	本 來	本 末			83	十三	哲人の	哲人が
51	十	章 向	章 句			83	十三	研究は	研究の
53	十三	教 祖	教 務			85	二	染 傳	宣 傳
57	六	な り	な く			85	九	富嶽の琵琶	富嶽の美
58	七	庭 体	靈 体			93	十二	産 上	産 土

252
775

明治四十年三月三日印刷
明治四十年三月十日頒布

著作發行人

齋藤誠逸郎

長縣縣下伊那郡飯田町八十二番地

全縣全郡全町九百廿五番地

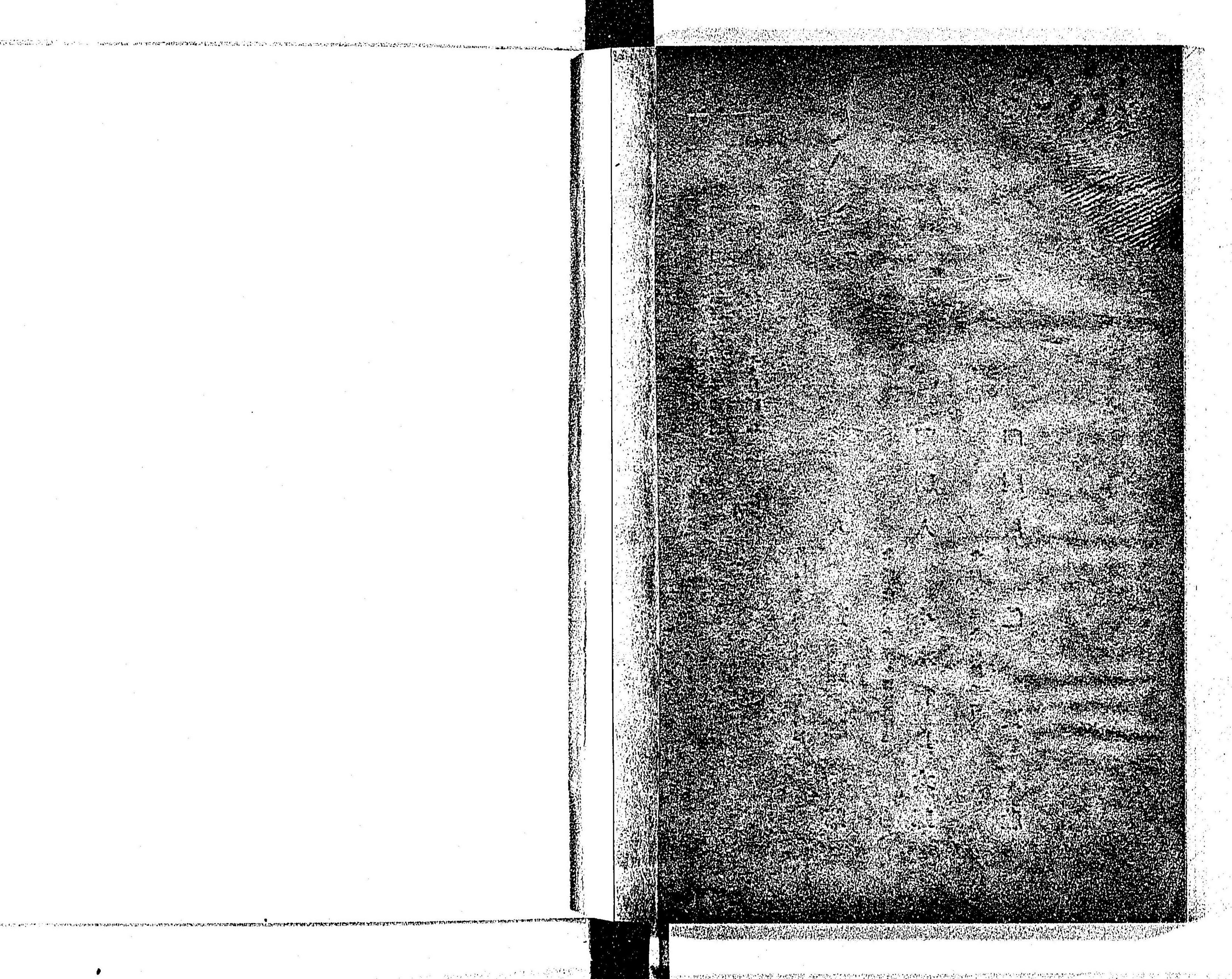
印刷人

小木曾良太郎

全縣全郡全町追手町

印刷所

健良社



[Redacted]



[Redacted]

[Redacted]

特 18

483

教義叢談

国立国会図書館

013945-000-1

特18-483

教義叢談

斎藤 誠逸郎/著

M40

ABB-0186

